

資料編

---

現地調査記録



## 現地調査・ヒアリング事例リスト

## a) 社会教育施設

1. 社会教育施設 YN
2. 社会教育施設 YM
3. 社会教育施設 MM

## b) 他の学校

4. 他の学校 IS
5. 他の学校 IU
6. 他の学校 KK

## c) 宿泊・住居施設

7. 宿泊・住居施設 TA
8. 宿泊・住居施設 SK
9. 宿泊・住居施設 YN
10. 宿泊・住居施設 IR
11. 宿泊・住居施設 EM
12. 宿泊・住居施設 GK
13. 宿泊・住居施設 KK
14. 宿泊施設 TA

## d) 医療・福祉施設

15. 医療・福祉施設 TI
16. 医療・福祉施設 TN

## e) その他の施設

17. その他の施設 TS
18. その他の施設 TA
19. その他の施設 OM

## f) 事務・研修施設

20. 事務・研修施設 NC
21. 事務所・研修施設 GK
22. 事務所・研修施設 KS

## g) 文化施設

23. 文化施設 TA
24. 文化施設・倉庫 TO

## h) 教育委員会ヒアリング

25. 教育委員会 T
26. 教育委員会 A

## 現地調査記録

### a) 社会教育施設

#### 1. 社会教育施設 YN

調査日時：2009年6月11日（木）15:00～16:00

調査日時：2009年7月29日（水）14:00～16:00

#### 概要

用途：市民活動支援・市民学習支援などの社会教育施設

廃校理由：少子化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1995年

利用開始年：1999年

構造：RC造3階建て（耐震診断済）

敷地面積：8,688㎡

延床面積：2,661㎡

建設年：1962年

運営主体：Y市YN運営委員会（指定管理者・NPO法人）

主な利用者：地域住民

利用者数：約5,000名/年

#### 経緯と施設の特徴

1995年に統合により閉校となった。廃校時、1学年1クラス程度であった。学校を壊さないで欲しいとの地元の要望が強かったこと、及び市に廃校活用による地域再生計画が無かったことから、1998年から再利用検討委員会において議論を行い、既設の公民館が当該地区から遠く不便であったため、翌1999年から社会教育施設として供用を開始した。

JR駅から近く、国道にも隣接しているなど、立地に恵まれており、運営・利用者の双方とも満足している。利用時間を深夜22:00までと長く設定していることもあり、土日はもとより平日も利用率も高い。スタッフも常駐しており、女性のグループも安心して利用できる点も評価されている。利用者の属性による利用制限を設けていないことから、地元はもとより、ホームページを通して市内全域、及び県内外の利用者も多い。

体育館は、社会福祉協議会が管理しており、地元の社会体育施設として利用されている。グラウンドは、県・市の広域避難施設として指定されており、災害用ヘリポートの利用も可能で、防災倉



資料図 4-1-1 右側にも校舎があったが消火活動実験後に撤去



資料図 4-1-2 バリアフリー対応の新設された玄関



資料図 4-1-3 玄関に設置されたスロープ及び手摺



資料図 4-1-4 事務室内観 利用者をサポートするスタッフ



資料図 4-1-5 稼働率の高い会議室 空調機を新設



資料図 4-1-6 会議室 OAフロア及び空調機を新設

庫も設置されている。また、一部を駐車場として利用しており、最大 100 台の駐車が可能である。プールは利用しておらず、消防用水利となっている。なお、光熱費等の施設運営費は、運営主体の負担である。土地・建物は、ともに市の所有である。

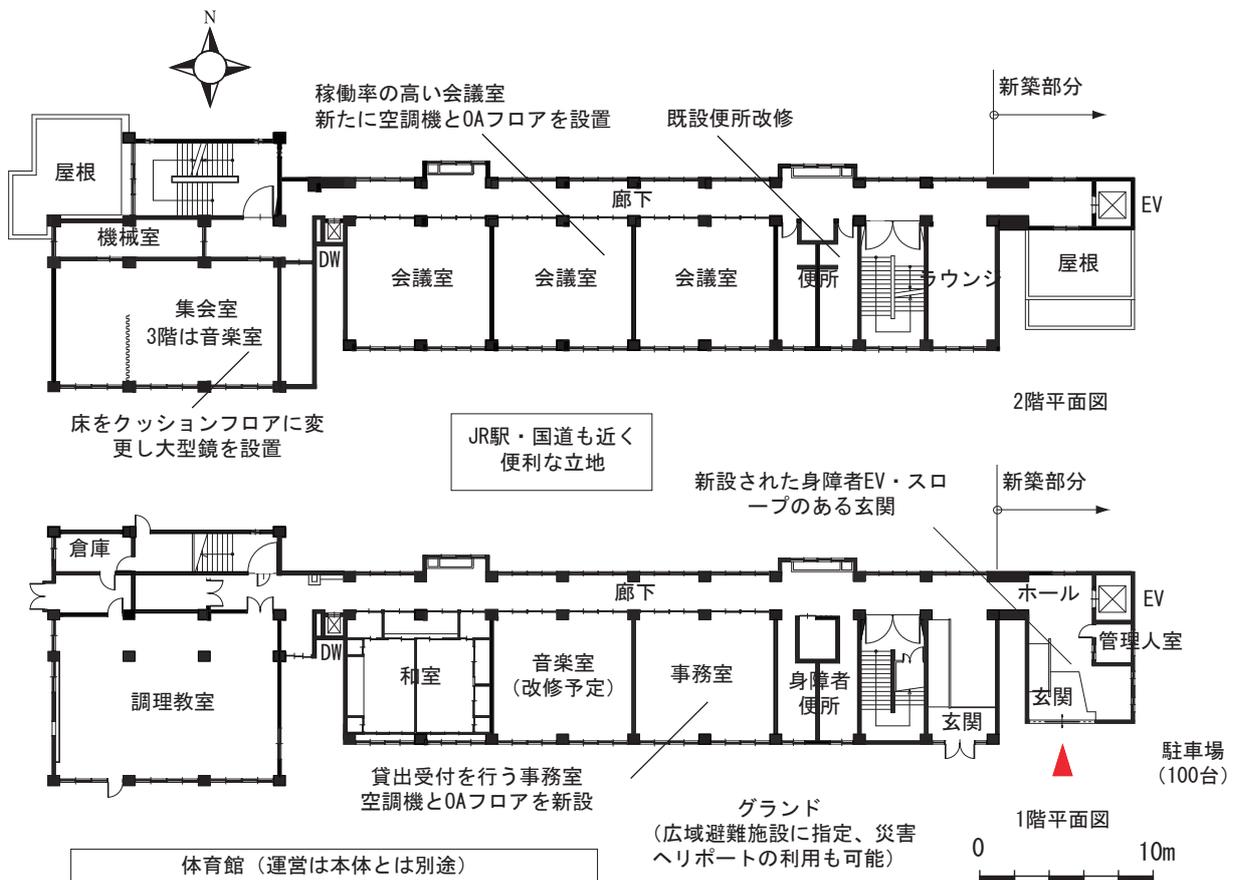
現在、小学校 2 校の統廃合に向けて地元と調整中である。

### 改修工事の概要

再利用を行う前に、消防の消火活動の訓練として、校舎の一部を実際に燃やす実験を行った。その部分の撤去後、玄関とエレベーターを新設した。

主な改修工事は、教室の空調設備の設置、音楽室床のクッションフロアの設置、事務室・パソコン教室床の OA フロアの設置、黒板からホワイトボードへの更新などで、バリアフリー改修工事は、エレベーターの新設、車いす用便所の新設、階段の手摺の設置、段差部分のスロープの設置などである。空調は、各室ごとに温度調整が可能で、利用者に好評である。

設計は、設計事務所で、施工は地元のゼネコンで行った。改修工事費は全て市の負担。来年度、音楽室への改修を予定している。廃校施設を再利用する長所は多いが、短所は特に無い。



## 2. 社会教育施設 YM

調査日時：2009年6月20日（土）13:00～14:30

### 概要

用途：歴史民俗資料館分室、図書室・不登校児童・生徒の適応能力指導室・会議室などを設置した社会教育施設、社会体育施設、駐車場、ゲートボール場、児童公園

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2001年

利用開始年：2002年

構造：RC造2階建て（旧耐震基準）

敷地面積：6,454㎡

延床面積：1,548㎡

建設年：1971年

運営主体：市教育委員会（教育委員会雇用職員が管理）

主な利用者：地域住民

利用者数：約4,600名/年

### 経緯と施設の特徴

開校は1873年、閉校は2001年3月で、廃校時の児童数は28人であった。

当初、民族資料館を新築する予定であったが、財政的に難しくなり、当該廃校を民族資料展示スペース併設の社会教育施設として、翌2002年4月から供用を開始した。市には廃校活用による地域再生計画は無く、土地・建物とも市の所有である。

当該施設は、地区の中心の立地のため、地域住民の生涯学習の場として、また児童が安全に遊べる場として活発に利用されている。体育館は、社会体育施設としてほぼ毎日利用されており、稼働率は高い。

主な来館方法は車で、バスもあるが本数が少なく不便である。

当該地域は、4学区、約350世帯の規模で、別に公民館がある。当該施設主体のイベントなどは特に行っていないが、遠足途中の休憩や老人会の花見など、気軽に利用されている。

以前は製材業が盛んな地域で、腕の良い職人も多くいたが、高齢化の進行とともに地域の産業全体が衰退している。



資料図 4-2-1 建物外観 手前の駐車場は元グラウンド



資料図 4-2-2 グラウンドをゲートボール場に整備



資料図 4-2-3 児童が安全に遊べる遊具と芝生広場を整備



資料図 4-2-4 1階の児童図書館



資料図 4-2-5 4教室でテーマごとに展示された2階民俗資料展示室



資料図 4-2-6 1階廊下 左側が旧職員室で現在は管理人室

### 改修工事の概要

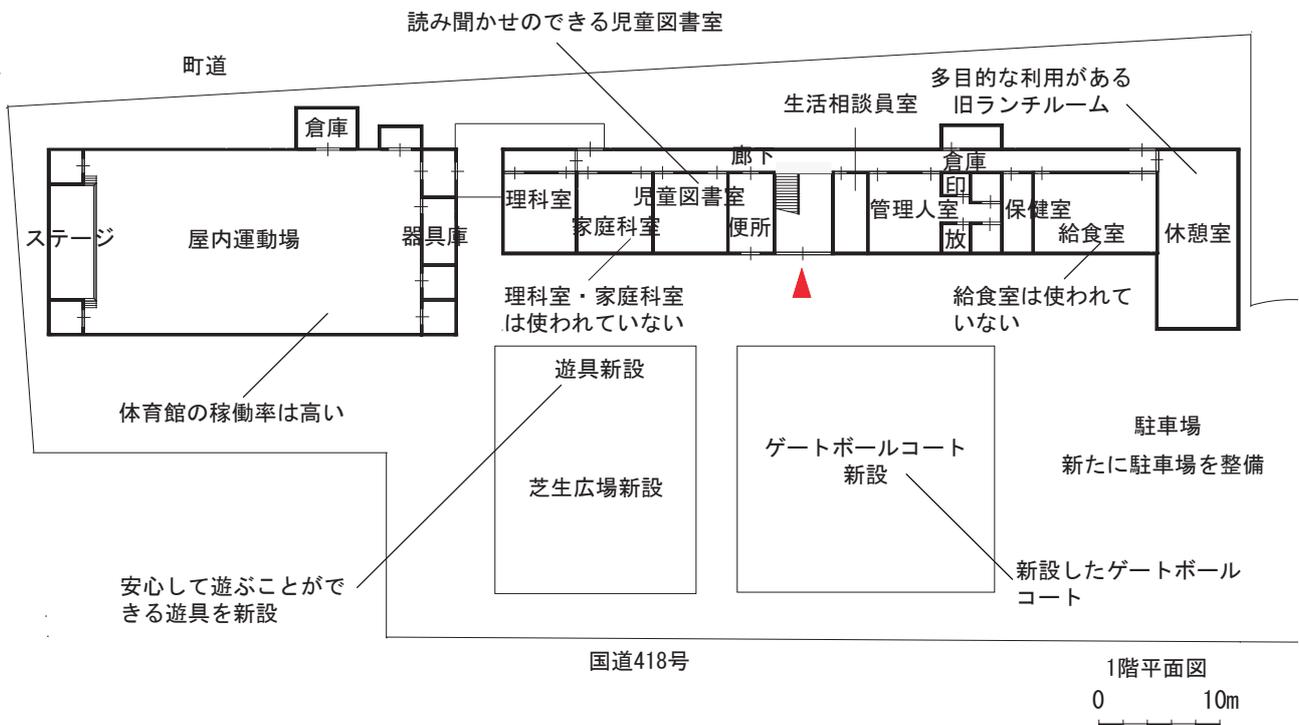
主な改修工事は、ゲートボール場・芝生広場・児童の遊具・駐車場の設置で、建物の改修工事はほとんど行っていない。

現在利用している部屋は、1階は子供の読み聞かせも行っている児童図書室、不登校児童・生徒の適応能力指導を行う生活相談員室、旧職員室の管理人室で、2階は一般利用の図書室、旧教室の民族資料展示室の4室のみである。そのほかの旧理科室、旧家庭科室、旧給食室、旧ランチルーム、旧音楽室は利用しておらず、もて余し気味となっている。

廃校施設を再利用する長所は、地域の人が集まることのできる心のよりどころの場所となっていることである。

短所は、校舎が古く補修をしたくとも財政的に難しいところで、当面大規模な改修を行う予定はない。

なお、維持管理費は、年間約100万円程度となっている。



資料 図 4-2-7 改修後平面図

### 3. 社会教育施設 MM

調査日時：2009年8月23日 14:30～15:30

#### 概要

用途：地域の図書室・会議室・倉庫などの社会教育施設、社会体育施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2008年

利用開始年：2008年

構造：RC造3階建て（旧耐震基準）

敷地面積：9,658㎡

延床面積：2,401㎡

建設年：1979年

運営主体：市教育委員会（教育委員会雇用職員が管理）

主な利用者：地域住民

利用者数：約480名/年

#### 経緯と施設の特徴

開校は1872年、閉校は2007年で、廃校時の児童数は49名であった。町の人口は、最近急激に2割も減少し、老年人口割合も高いことから税収も減少、財政的に厳しく廃校の選択をせざるを得なかった。

廃校で寂しくなった地域の活性化のためにも再利用して欲しいとの意見が出され、地元と協議し同年4月から社会教育施設として再利用することとなった。近くに公民館があり、社会教育施設としてはややもて余し気味ではあるが、体育館とグラウンドの需要は高い。町の避難所に指定されている。最近の利用者数は、4月：245人、5月：379人、6月：911人、7月：398人となっている。

現在、教育委員会で更なる有効活用に向け、再利用方法について検討を行っている。土地、建物とも町の所有で、運営・維持管理も町教育委員会で行っている。

地域のイベントや盆踊りなどは、それぞれの町内で行われており、当該施設主催で地元との交流をはかる企画やイベントなどは特に行っていない。

現在、児童は、統合先の小学校へスクールバスを利用している。



資料図 4-3-1 建物外観 外壁の塗装などは行われていない



資料図 4-3-2 建物外観 当該校舎は倉庫として利用



資料図 4-3-3 廊下内観 内装は廃校当時のまま利用されている



資料図 4-3-4 2階図書室内観



資料図 4-3-5 図書閲覧室 新たに空調機を新設した



資料図 4-3-6 メモリアルルーム

### 改修工事の概要

校舎は1963年の竣工で、1階の会議室の2室と2階の図書館、及び資料室を公民館として利用している。特別教室棟は、倉庫のみの利用となっている。

主な改修工事は、図書館閲覧室の空調設備の新設のみである。耐震改修工事は、供用中の学校を優先して行っており、当該施設は行っていない。

廃校施設を再利用する長所は、自然が豊かなロケーションに建つ建物を廃校のままとせず、地域のために微力ながら利用できることで、短所は、建物の老朽化で雨漏りなどの維持管理に手間がかかることである。

b) 他の学校

4. 他の学校 IS

調査日時：2009年7月1日（水）13：30～15：00

概要

用途：全寮制私立小中高等学校（不登校支援フリースクール）

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2007年

利用開始年：2007年

構造：RC造3階建て（旧耐震基準）

建築面積：6,694㎡

延床面積：1,778㎡

建設年：1981年

運営主体：学校法人

主な利用者：学園生

利用者数：約55名（教職員及び生徒数）

経緯と施設の特徴

教師であった学園長が、いじめなどから不登校となった児童・生徒たちでも安心して学ぶことのできる学校として、7年前から近くのゴルフ場のクラブハウスを利用して開校した。

児童・生徒たちが社会との関係を再構築するには、都市部のコミュニティでは大き過ぎる。当該地域の方が地域社会の行事などを通じたスムーズな人間関係の形成に適しており、自然も豊かで情緒的にも好ましいと考える。

学校法人取得のためには、教室、体育館、グラウンドの整備など満たさなければならない規定が多く、クラブハウスを利用した校舎では基準を満たせなかった。資金的も厳しかったことから、廃校の再利用を複数の市町村に申し入れた。

当初は、不登校スクールの趣旨がうまく伝わらなかったが、クラブハウス時代の活動を知っていた、地元から再利用の要望があった町から再利用可能との話を頂いた。

施設は教室数も多く、特別教室もあり、かつ地元と町の好意で教材類もそのまま利用させてもらえるなど、法人格の学校に十分足りる条件を満たしていた。

当該施設に移転し、今年で2年目である。土地・建物とも町の所有で、20年の賃貸契約を結んでいる。



資料図 4-4-1 体育館外観 校舎の後方がダム



資料図 4-4-2 建物外観 外壁の再塗装は行われていない



資料図 4-4-3 廊下 正面が職員室



資料図 4-4-4 食堂 奥側が調理室で毎日3食を提供している



資料図 4-4-5 理科室 現在も理科室として使われている



資料図 4-4-6 旧教室を利用した畳を敷いた娯楽室

児童・生徒の出身は、東京、大阪、兵庫、北海道など広範囲にわたっており、現在の児童数は23名、教職員は約30名で、毎晩教員2名が宿直している。食事は、3食とも給食室で作っている。

学校の評議委員として地元にも加わって頂き、信頼の構築に努めている。少子高齢化の進んだ過疎の町に若者が来ることとなり、不足していた祭りの神輿のかつぎ手となるなど、積極的に地元との交流を深めながら、地域活性化の後押しを行っている。

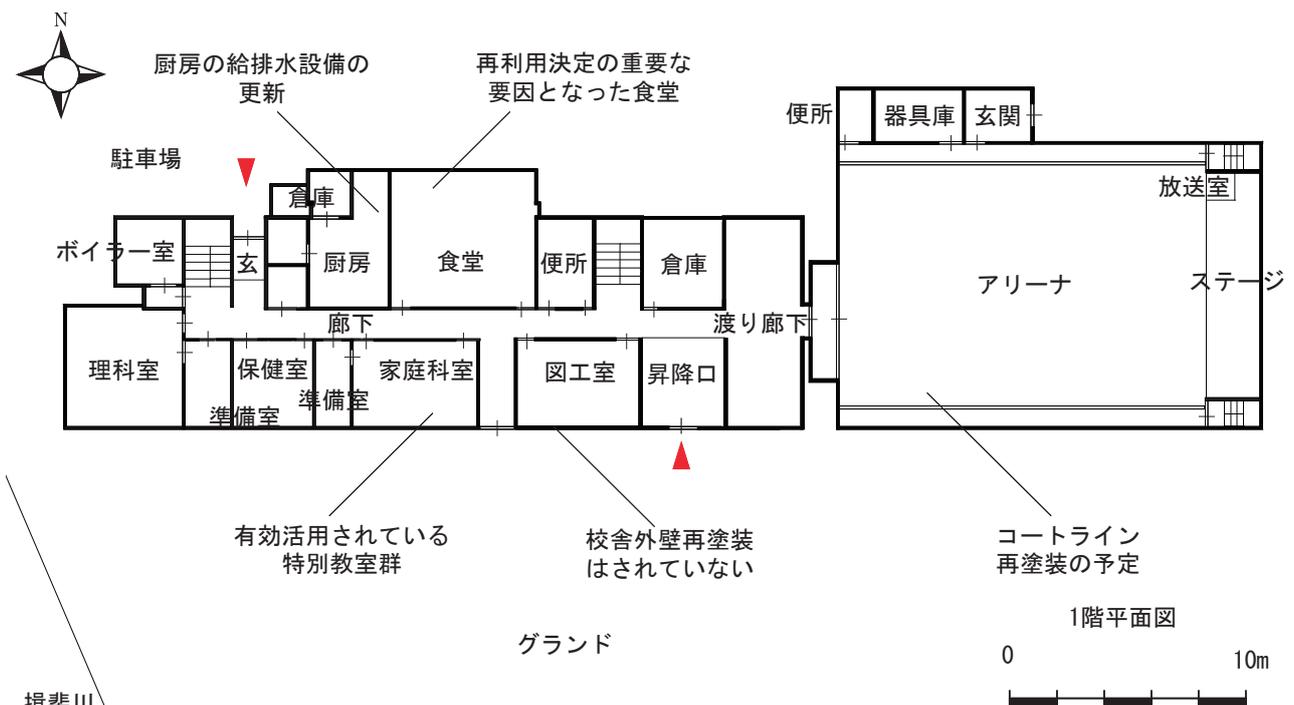
### 改修工事の概要

校舎は1981年の竣工で、新耐震基準への移行期と重なっており、耐震的な問題の有無は確認できていない。

主な改修工事は、厨房設備、手洗い・便所などの給排水設備の更新である。今後、体育館の床・コートラインの再塗装、及び洋式便器への更新を行う予定である。風呂は設置しておらず、毎日近く道の駅の温泉を教職員も含め利用している。

当初、教室に仮設間仕切りを設置した簡易な宿泊室を設けていたが、用途変更が必要となることがわかり、へき地校に設置されている職員寮を地元ゼネコンの設計施工で宿泊室へと改修した。

廃校施設を再利用する長所は、イニシャルコストを抑えられることで、資金があれば新築とした可能性は高い。短所は、街が遠いことで、生徒にとっては当該学校の立地は適しているが、生活に必要な物品の購入などで不便を感じるが多々ある。



## 5. 他の学校 IU

調査日時：2009年9月6日（日）10:00～11:00

### 概要

用途：全寮制私立高等学校

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2002年

利用開始年：2005年

構造：RC造3階建て（新耐震基準）

敷地面積：27,890 m<sup>2</sup>

延床面積：3,271 m<sup>2</sup>

建設年：1984年

運営主体：民間企業（構造改革特区制度を利用）

主な利用者：学園生

利用者数：約50名（教職員及び生徒数）

### 経緯と施設の特徴

市町村合併直前の過疎化による廃校で、廃校時の児童数は約10名であった。校舎は、築後20年と比較的新しかったことから、町で、再利用の検討を行っていた。

学校の開設に適した施設を探していた経営者が、当該地域で開催されたセミナーで廃校を知り、町長に再利用を申し入れた。

土地、建物とも市の所有で、賃貸借契約を結んでいる。体育館とグラウンドは別管理で、指定管理者が管理しており、地域と共同で利用している。

現在、生徒数は約50名で、生徒の出身は当該廃校が立地している関西圏が多いが、仙台、横浜、長野など広範囲に及んでいる。

地域の祭りや運動会などを通して地域と学校との交流も進んだこともあり、地域との関係は良好である。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、教室の寮室への改修で、1教室を2分割して1ユニットを構成している。1ユニットの定員は5名で、個人スペースとして机、ベッド、収納棚が設置されており、可動式衝立によりプライバシーが確保されている。共用設備として各ユニット毎にユニットシャワー、トイレ、ミニキッチン、洗面、及び空調設備も設置している。また、寮室エリアと他のエリアを区別するた



資料図 4-5-1 外観 手前が職員室棟で奥側が教室棟



資料図 4-5-2 ランチルームはそのまま食堂として利用



資料図 4-5-3 新たに設けられた男子寮の入口扉



資料図 4-5-4 寮内廊下 廊下側の間仕切り壁はそのまま利用



資料図 4-5-6 上段がベッドスペース、下段が学習スペース

めに廊下に扉を新設した。

竣工時から設置されていた空調機は、故障していたものが多く、大半を更新した。なお、教室は空調機を設置しておらず、扇風機や可搬式ファンヒーターを利用している。

新耐震基準により設計された建物のため、耐震改修工事は行っていない。また、体育館、及びプールは、状態が比較的良好であったことから、改修は行っていない。

廃校施設を再利用する長所は、学校建築の特徴とも言えるゆとりのある敷地とその建築空間を活かすことができることである。加えて周辺地域のロケーションの良さも長所の一つで、短所は特に無い。

設計は設計事務所にて行い、施工はゼネコンで行った。改修工事費は、約2億円で全て高校側の負担である。



資料 図 4-5-7 改修後平面図

## 6. 他の学校 KK

調査日時：2009年8月11日（火）16:00～17:00

### 概要

用途：私立専門学校

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2002年

利用開始年：2004年

構造：RC造3階建て（旧耐震基準）

敷地面積：4,142 m<sup>2</sup>

延床面積：1,433 m<sup>2</sup>

建設年：1965年

運営主体：学校法人

主な利用者：専門学校生徒、地域住民

利用者数：－（現在休校中）

### 経緯と施設の特徴

閉校は2001年頃で、当該市内には廃校が数校あるが、当該学校の経営者が、自然の豊かさや海に隣接したロケーションの良さ、市中心部に近い立地、及び1965年の竣工で建物の状態も良好であったことから、専門学校としての再利用を市に申し入れた。

市側も再利用の検討を行っていたことから、比較的スムーズに再利用できた。地元との協議を経て、2004年4月に地域の文化を発信する専門学校として開校した。

土地、建物ともに市の所有で、無償貸与となっているものの、生徒数が伸びず、現在は専門学校としては休校としており、Y市にある本校の研修センターとして利用している。

休校となったことで、地元の人たちは残念がっており、地域活性化の一翼を担う施設として、当該学校に対する地元の期待を強く感じている。

グラウンド、講堂はともに地元との共同利用となっており、講堂は校舎内部を通らなくても利用できるように、外部から直接入ることができる工夫をしている。



資料図 4-6-1 海に面し景観豊かで市内の中心部に近い立地



資料図 4-6-2 校舎外観 外観は改修を行っていない



資料図 4-6-3 廊下内観 壁と建具を明るい色で新たに塗装



資料図 4-6-4 階段室正面のデザインされたサイン壁



資料図 4-6-5 内装の全てを更新した食堂  
正面奥側が厨房

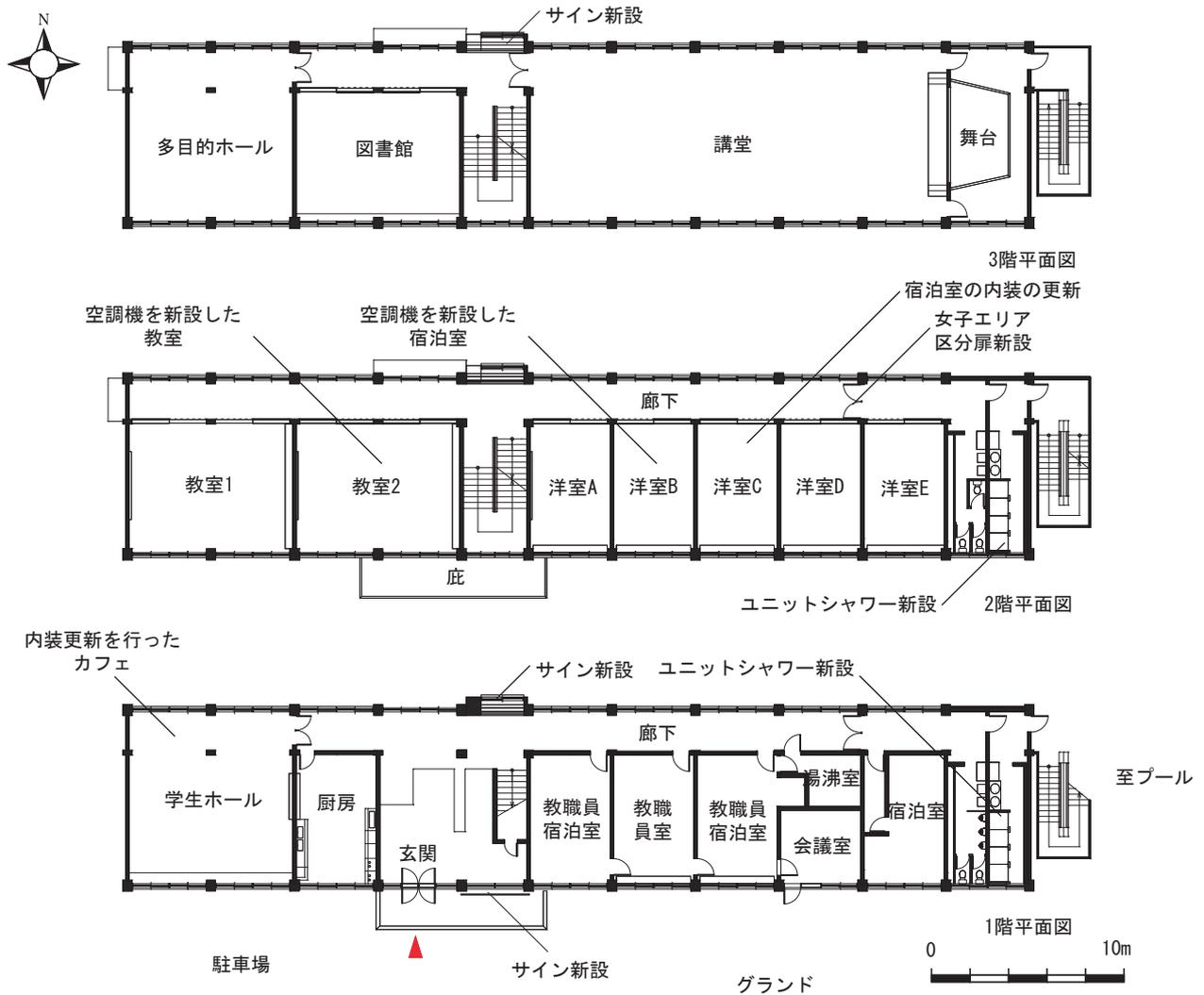


資料図 4-6-6 ベッドの設置された宿泊室

### 改修工事の概要

主な改修工事は、外部スチールサッシのアルミサッシへの更新、内装壁、及び天井の塗装、便所の全面改修、シャワールームの新設、教室間仕切りの一部撤去、宿泊室の設置（宿泊人数24人で、今年60人まで宿泊可能に整備）、女子学生エリアの区画扉の設置などで、そのほか空調機の新設、階段壁へのグラフィックサイン設置、浄化槽の更新などである。なお、設計は設計事務所に依頼した。

廃校施設を再利用する長所は、インシャルコストを抑えられることで、短所は特に無いが、RC造のため壁を撤去できない構造的な制約である。



資料 図 4-6-7 改修後平面図

c) 宿泊・住居施設

7. 宿泊・住居施設 TA

調査日時：2009年4月15日（木）10：00～12：00

概要

用途：ユースホステル

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1995年

利用開始年：1998年

構造：木造1階建て（旧耐震基準）

敷地面積：—m<sup>2</sup>

延床面積：495m<sup>2</sup>

建設年：1927年

運営主体：民間企業

主な利用者：ユースホステル利用者、地域住民

利用者数：約1,400名/年

経緯と施設の特徴

市町村合併前の町は地域活性化を目指し、廃校を積極的に再利用する方針であったことから、町内の宿泊施設に勤務していたオーナーに知人の経由で、廃校再利用の企画提案の依頼が持ち込まれた。当該学校を隣接する市民農園の休憩室とし、オーナーが施設の管理や学区の管理（当該地区の住民は24名）を行う職員となり、収入源として宿泊施設の運営を行う提案が採用された。なお、土地、建物とも市の所有である。

宿泊者は、関東圏、関西圏など広範囲にわたっており、年間の平均利用者は、約1,400人である。集会所としての利用やゲートボール・バレーボールなどを通じた宿泊客とのコミュニケーションもあり、地域の交流拠点となっている。立地は都心から比較的近いものの、標高が高く夏は涼しい。

改修工事の概要

校舎は1927年の竣工で、廃校を利用したパブリックスペースを広く確保した北海道の宿泊施設を参考に改修を行った。なお、廊下の床は既設の板張りのまま利用している。主な改修工事は、厨房・風呂・便所・洗面などの水廻りの増築と屋根棟瓦の更新、宿泊室、食堂、談話室、畳コーナーなどの新設である。改修の際



資料図 4-7-1 建物外観 基本的に竣工当時のままの姿を残している



資料図 4-7-2 フロント前の談話コーナー 内装は木を多く採用



資料図 4-7-3 宿泊室前の廊下 ギャラリーとしても利用



資料図 4-7-4 宿泊室 2段ベッドで定員は6名



資料図 4-7-5 宿泊室 畳のみの宿泊室も1室設されている



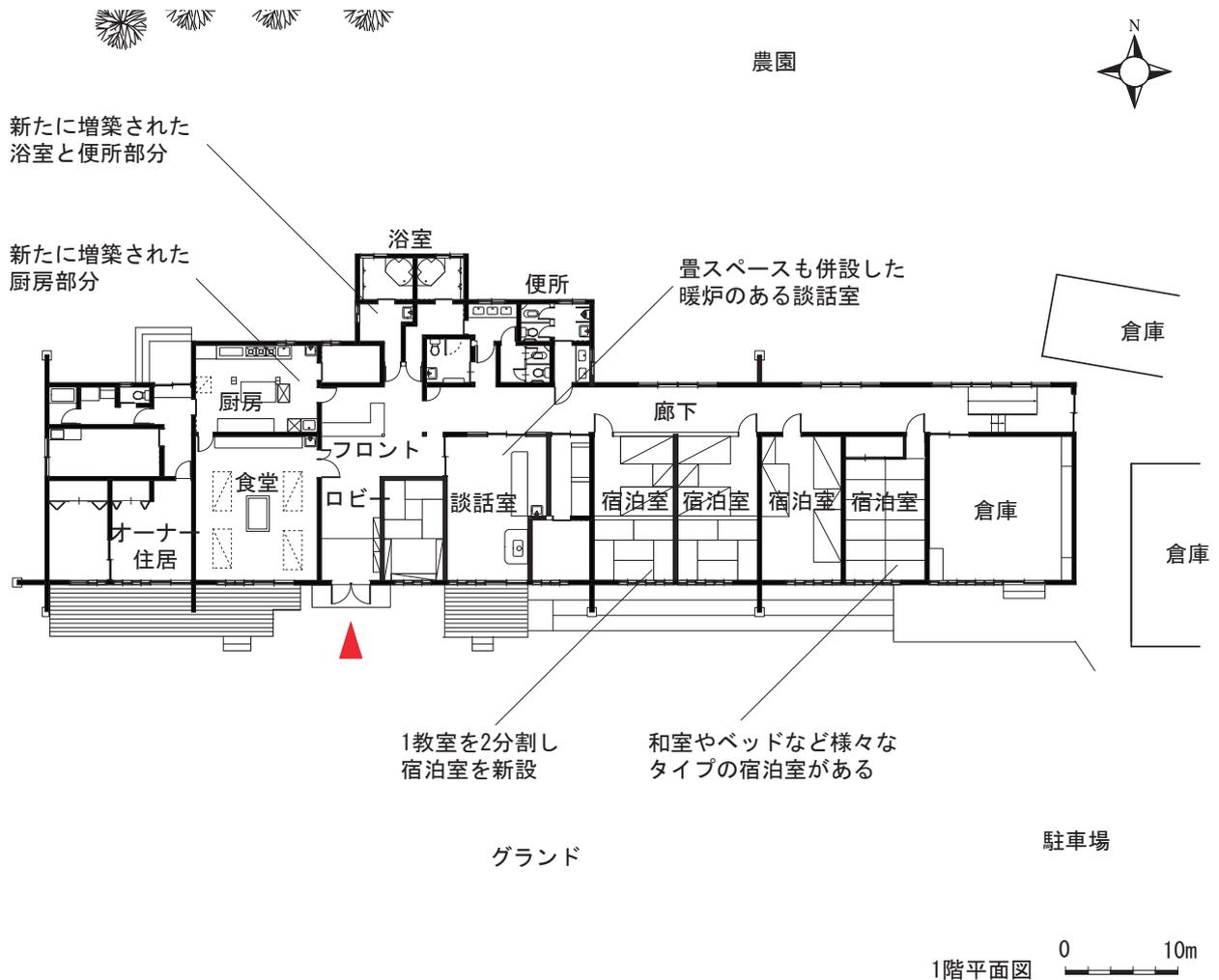
資料図 4-7-6 再利用時に新たに増築された厨房

に制約となった部分は、特に無かった。2002年に井水から上水となったものの、ガスはプロパンガスのままである。

耐震改修は行わなかったが、これまで大きな地震を幾度となく乗り越え、建ち続けていることから特に不安は感じていない。

設計は、知人の学校移築設計経験のある設計者に依頼し、設計・監理、及び改修工事費は、町の負担で行った。建築確認申請、消防の同意など、必要な諸検査は全て行っている。

廃校施設を再利用する長所は、「廃校施設を利用した宿泊施設」として利用できたこと全てで、話題性・注目度が高い。里山の立地環境を活かした、炭焼き体験、間伐材伐採体験、ほたる見学ツアーなどを通して地域の人たちとの交流をはかり、地域活性化への貢献もできている。短所は、断熱性能が低く、暖房が利きにくいことで、他には特に無く、何と言っても自分自身が気に入っている。



資料 図 4-7-7 改修後平面図

## 8. 宿泊・住居施設 SK

調査日時：2009年8月1日（土）12：30～13：30

### 概要

用途：体験型宿泊施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1995年

利用開始年：1995年

構造：木造2階建て（旧耐震基準）

敷地面積：6,208㎡

延床面積：1,070㎡

建設年：1947年

運営主体：指定管理者

主な利用者：T市（当該下流域の市）、地域住民

利用者数：約3,400名/年

### 経緯と施設の特徴

明治初期（1869年頃）の開校で、1995年に閉校となり、廃校時の児童数は17名であった。町が、維持管理費用の軽減のため、ダムを通して交流のある下流域の自治体と協議し、上下流域の交流をはかるT市の宿泊施設（維持管理費はT市の負担）として、再利用することとなった。管理者は指定管理者制度にて特定されている。

利用者の評価は高く、年間約2,000名の利用があり、特に週末は予約を取りにくい状況である。利用者の属性による制限は行っておらず、本来の利用者であるT市、及び当該地域の人が利用できない場合が生じており、運用方法を検討中である。地元の子供会の利用（学区の児童は4人で通学にはスクールバスを利用）があるものの、地域（約80世帯）との交流は弱く、今後の課題と考えている。

### 改修工事の概要

校舎は1947年頃の竣工で、主な改修工事は、外壁の塗装、シャワー棟の新築、室内壁の塗装、管理事務室の床仕上材の張替え、宿泊室となる教室のカーペットの設置、雨樋の補修などで、バリアフリー改修工事は行っていない。

当初、日帰り若しくはグラウンドにテントを張るなどのデイキャ



資料図 4-8-1 建物外観 外壁は羽目板で屋根は瓦屋根



資料図 4-8-2 廊下内観 一部の建具を更新している



資料図 4-8-3 教室にカーペットを敷き込んだ宿泊室



資料図 4-8-4 リネン庫



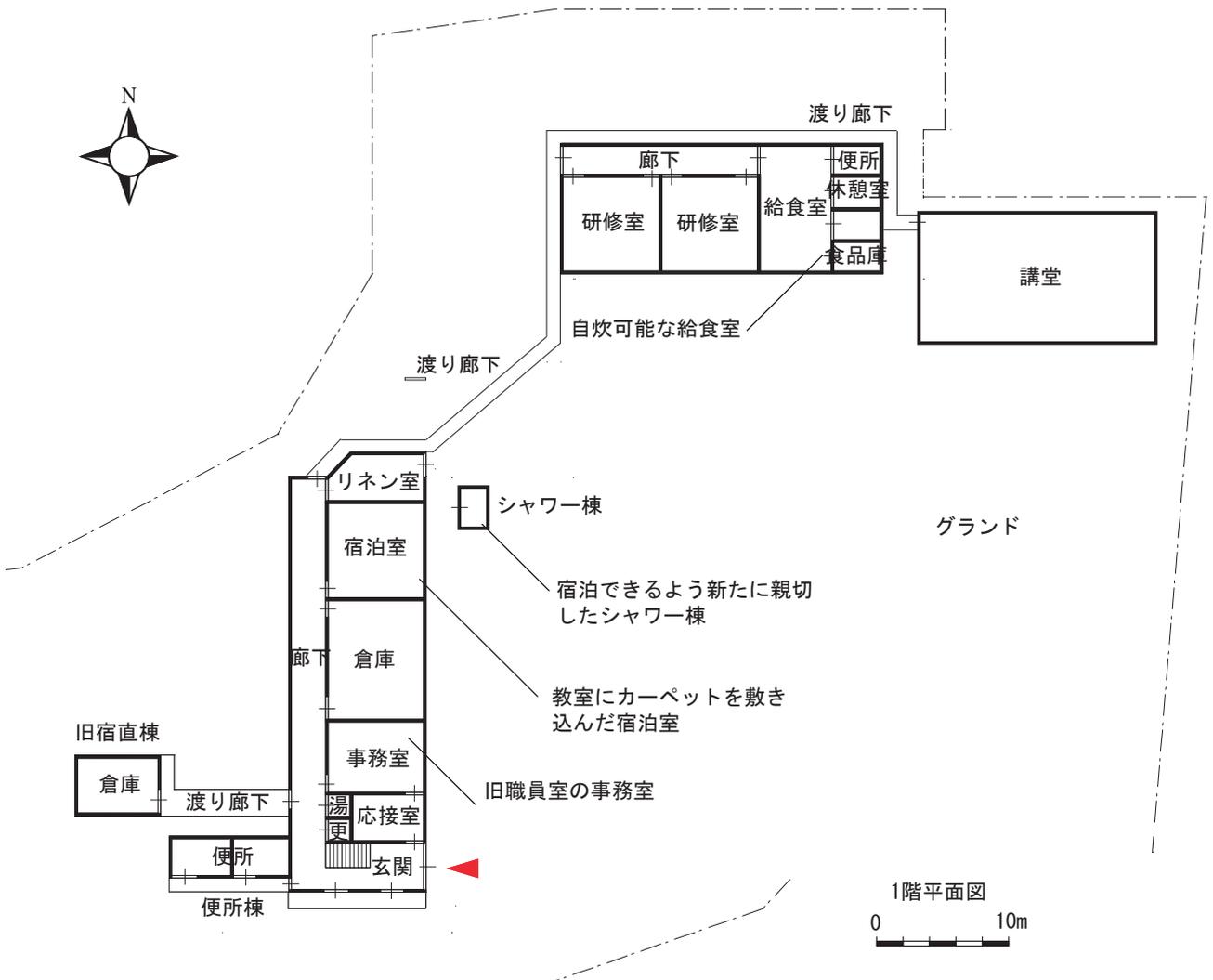
資料図 4-8-5 旧給食室をそのまま利用  
自炊も可能

ンプでの利用を予定していたが、T市からの移動時間を考慮し、宿泊もできるようにシャワー棟を設置した。

廃校施設を再利用する長所は、学校が取り壊されず残され、地域の人の心のよりどころとなっていること、RC造の校舎しか知らない子供たちに木造校舎の温もりの良さを知る場となっていることである。短所は、断熱性能が低いことである。



資料図 4-8-6 新設されたシャワー棟



資料 図 4-8-7 改修後平面図

## 9. 宿泊・住居施設 YN

調査日時：2009年7月1日（水）16:00～17:00

### 概要

用途：体験型宿泊施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1995年

利用開始年：1996年

構造：RC造2階建て、木造1階建て（旧耐震基準）

敷地面積：5,233㎡

延床面積：1,977㎡

建設年：1961年

運営主体：教育委員会

主な利用者：地域住民

利用者数：-名/年

### 経緯と施設の特徴

1995年に閉校となり、地元から廃校後も校舎を取り壊さず残して欲しいとの要望があったこと、市としても取り壊し費用が必要なこと、及び廃校再利用による地域再生計画も無かったことから、地元と協議を行い、宿泊施設として再利用することとなった。そのほか選挙時の投票所、防災避難場所としても利用している。

土地、建物とも市の所有で、運営は教育委員会が行っている。利用のピークは7・8月の夏季に集中しており、スポーツ系のサークルの利用者が多い。なお、盆踊りなどの地域の祭りは、近くの公民館で行っている。

当該学校を利用していた児童は、現在スクールバスで通学している。

### 改修工事の概要

校舎は1961年頃の竣工で、主な改修工事は、宿泊室への畳の敷き込み、コイン式ユニットシャワー（4台）、屋外調理場、多目的便所の新設、及び非常用照明などの用途変更により必要となった防災設備の設置などである。改修工事において問題となった内容は特に無かった。

設計・施工ともに地元の工務店にて行った。

耐震改修工事は、町の財政が厳しいことから、供用中の学校を



資料図 4-9-1 建物外観 外壁は羽目板で屋根は瓦棒葺き



資料図 4-9-2 RC造棟の廊下内観

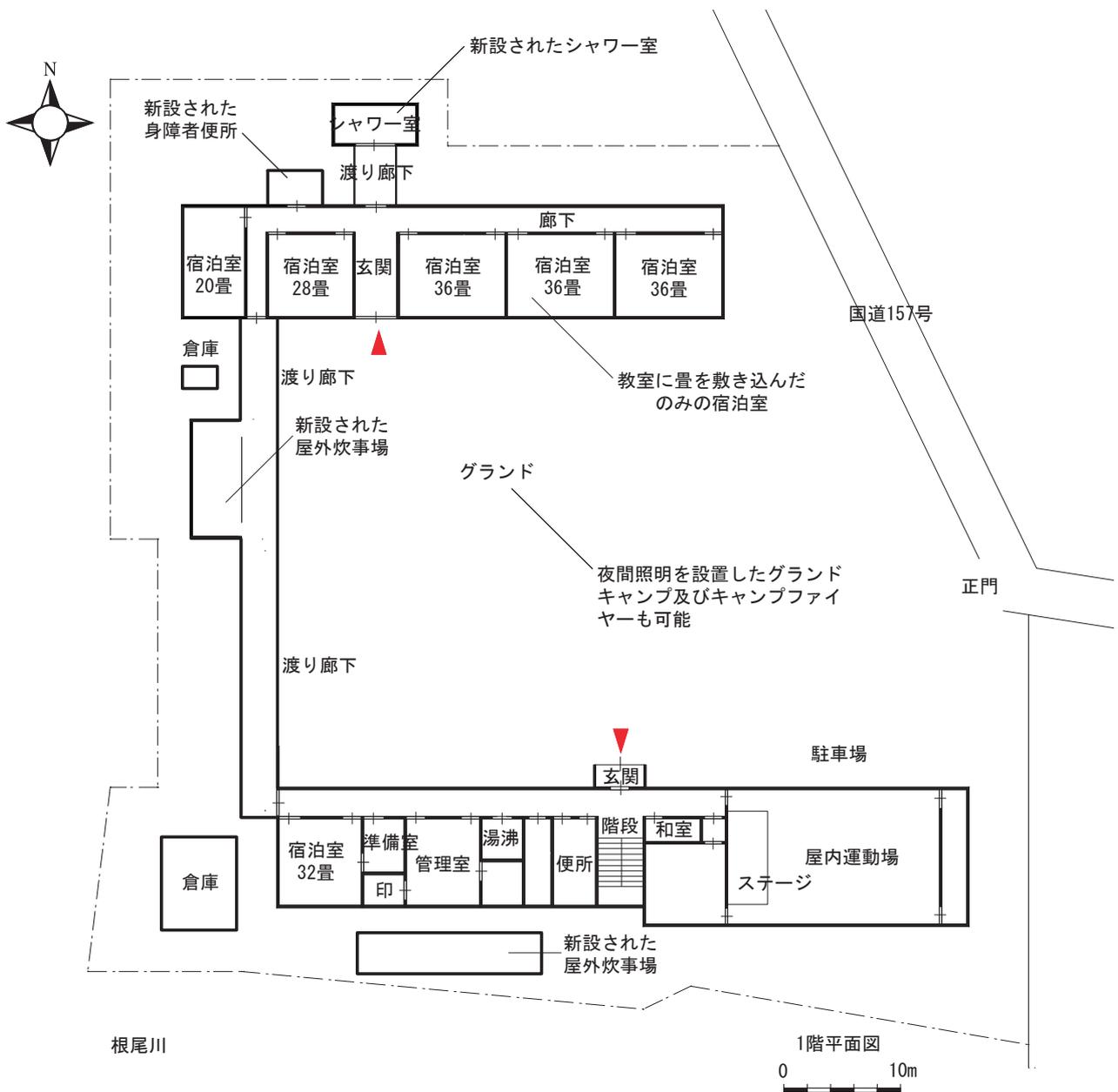


資料図 4-9-3 木造棟の合廊下内観 教室に畳を敷いた簡易な宿泊室

優先して行っていることから、当該施設では行っていない。

廃校施設を再利用する長所は、雰囲気のある木造校舎を残すことができ、地元のこころのよりどころとなっていることで、短所は、雨漏りも無く建物の状態が比較的良好なため特に無い。

地元のシルバーセンターをを利用して、年に2～3回、草刈を行うなど定期的なメンテナンスを行っている。



資料 図 4-9-4 改修後平面図

## 10. 宿泊・住居施設 IR

調査日時：2009年6月13日（土）14：30～16：00

### 概要

用途：宿泊施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2003年

利用開始年：2003年

構造：RC造3階建て（旧耐震基準）

敷地面積：5,946㎡

延床面積：1,407㎡

建設年：1978年

運営主体：民間企業

主な利用者：大学ゼミ・サークル、地域住民

利用者数：約6,000名/年

### 経緯と施設の特徴

地元出身のオーナーが廃校を知り、以前の職場が大学で学生のニーズを熟知していたこと、廃校を大学の研修センターとして再利用した経験があったことから、地域活性化のため、青年の生活を支援する宿泊施設としての再利用を村長へ申し入れた。学校は、農山漁村地域の数少ない地域・文化の中心で、明るく楽しい記憶が残る場所であり、廃校は地域にとって痛恨の極みと考える。

施設のグレード設定は、民宿では人数サービスに限界があり、公立の青少年の家などは近年人気は低く、旅館やホテルの高グレードでもない、日常よりも少し上質な空間で料金も抑えた（家族4人で約2万円/泊）に設定している。

グラウンドや体育館、及びプールも自由に使えることから大学のゼミやサークルなどの利用が多く、気兼ねなく楽器が演奏できることなどが好評で、キャンプファイヤーなどを行う利用者も多い。

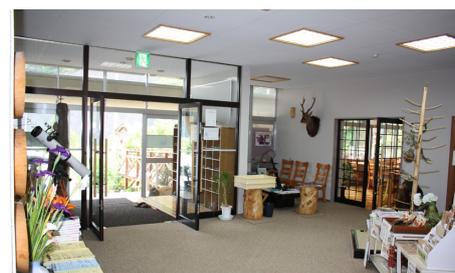
HPからの利用予約が多く、口コミでも広がっており、春・夏の週末は満室で、利用者数は年間約6,000人となっている。

地元の方を魚、炭焼き、蛍ガイドなどの講師として迎え、交流を深めている。また、周辺には飲食施設がほとんど無いことから、食堂、グラウンドに別棟で新設した蕎麦屋、生ハムの工房、パン焼き釜などを地域のレストランとして利用してもらっている。

今後、若者を主な利用者とした里山文化が体験でき、団塊の世



資料図 4-10-1 建物外観 そば工房などの独立建屋が見える



資料図 4-10-2 元昇降口のロビー・フロント内観



資料図 4-10-3 宿泊室前廊下 床仕上げはタイルカーペット



資料図 4-10-4 宿泊客以外の地域の住民もレストランとして利用



資料図 4-10-5 2階の旧教室に設置された明るく清潔感のある浴室



資料図 4-10-6 和室タイプの宿泊室

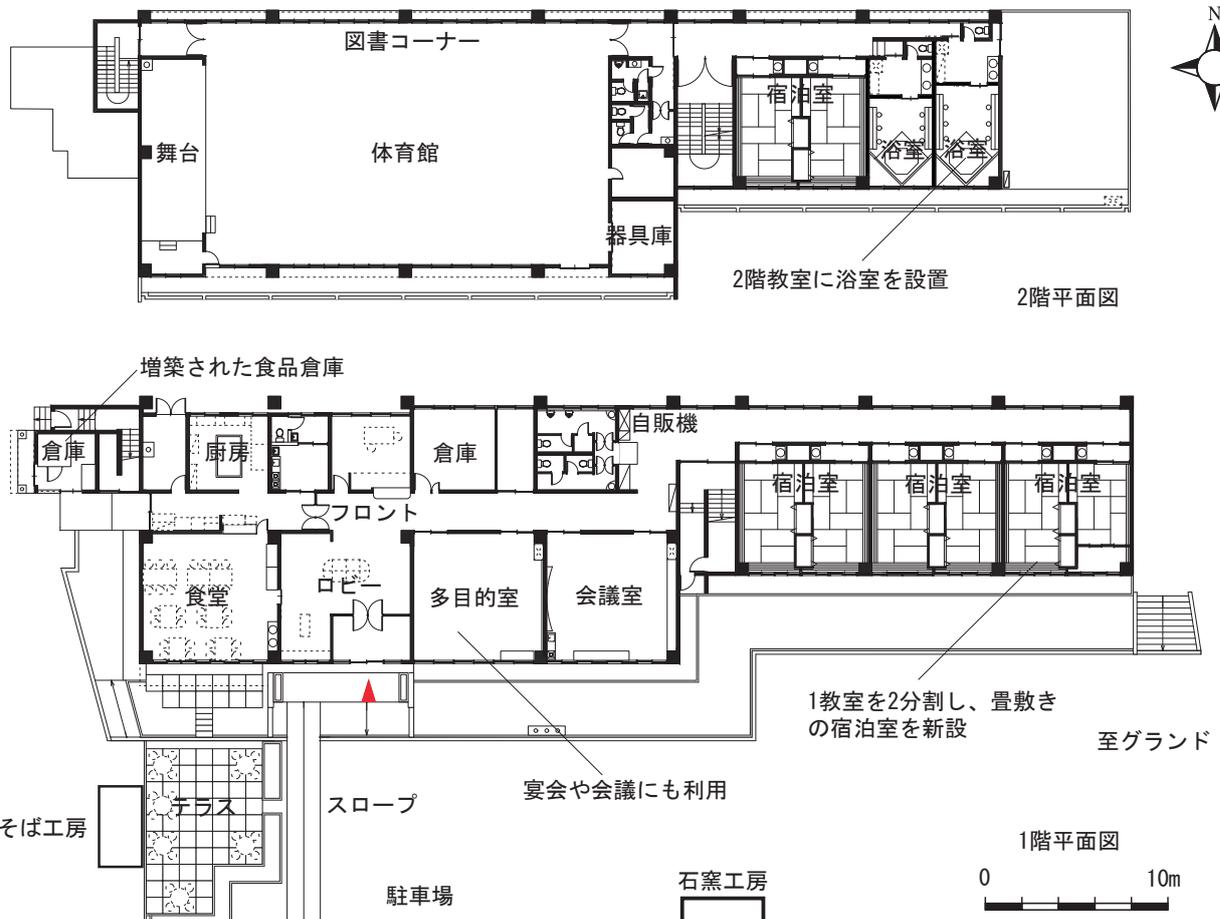
代がもうひと働きできる NPO 法人を立ち上げる予定である。

公民館は、数多くあるが有効に活用できておらず、アイデアやソフトが無いままで廃校を再利用することは難しいと考える。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、宿泊室、厨房設備、空調機の設置などである。耐震性能は、未確認であるが特に問題とは考えていない。体育館のアスベスト調査は町で行い、問題が無いことを確認した。設計は、知人の建築家に依頼し、学校の特徴を活かした施設とすることができたと考えている。そのほか、建物の入口が道路に背をむけた配置のため、ボランティアの協力を得て壁面に施設を PR するペイントを施した。施工は、既設の校舎の施工を行ったゼネコンに依頼した。なお土地、建物とも町の所有で、賃貸借契約をしているが、改修費用は、町とオーナーで分担した。

廃校施設を再利用する長所は、もともと学校の持っている施設の特徴自体が長所であり、廃校の再利用に対して心配したことは無く、学校の長所を有効に活かすことができる施設にできた点。



資料 図 4-10-7 改修後平面図

## 11. 宿泊・住居施設 EM

調査日時：2009年5月30日（土）13:00～14:00

### 概要

用途：宿泊施設、社会体育施設

廃校理由：市町村合併、及び過疎化による人口減少に伴う  
児童数減少

廃校年：2005年

利用開始年：2006年

構造：木造2階建て（新耐震基準）

敷地面積：19,999 m<sup>2</sup>

延床面積：2,600 m<sup>2</sup>

建設年：1999年

運営主体：教育委員会

主な利用者：地域住民、大学ゼミ・サークル等の団体など

利用者数：-名/年

### 経緯と施設の特徴

市町村合併に伴い廃校となり、数年間利用していなかったが、地元産の木材を積極的に利用した木造校舎で、以前表彰された優れた建築物であることから、宿泊施設として再利用することとなった。

利用者は、大学の体育会系のクラブ・サークルなどの合宿が多く、週末の利用は多いものの平日は少ない状況である。現在のところ、無料で利用できるが近く有料となる予定である。

体育館、及びグラウンドは地域の社会体育施設としても活用している。プール・遊具は、廃校後メンテナンスを行っておらず、利用不可としている。敷地に隣接した木造一戸建ての官舎が4棟あるが、利用していない。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、建物も新しいことから、特に行っていない。宿泊時は教室に畳を敷き込み利用している。

寝具は施設側では用意しておらず、利用者の持ち込みとしている。風呂も設置しておらず、近くのスーパー銭湯を利用する機会が多い。調理は、家庭科教室での自炊が可能である。



資料図 4-11-1 昇降口 内装材に木をふんだんに用いた内装



資料図 4-11-2 廊下内観 地元産の木材が利用されている



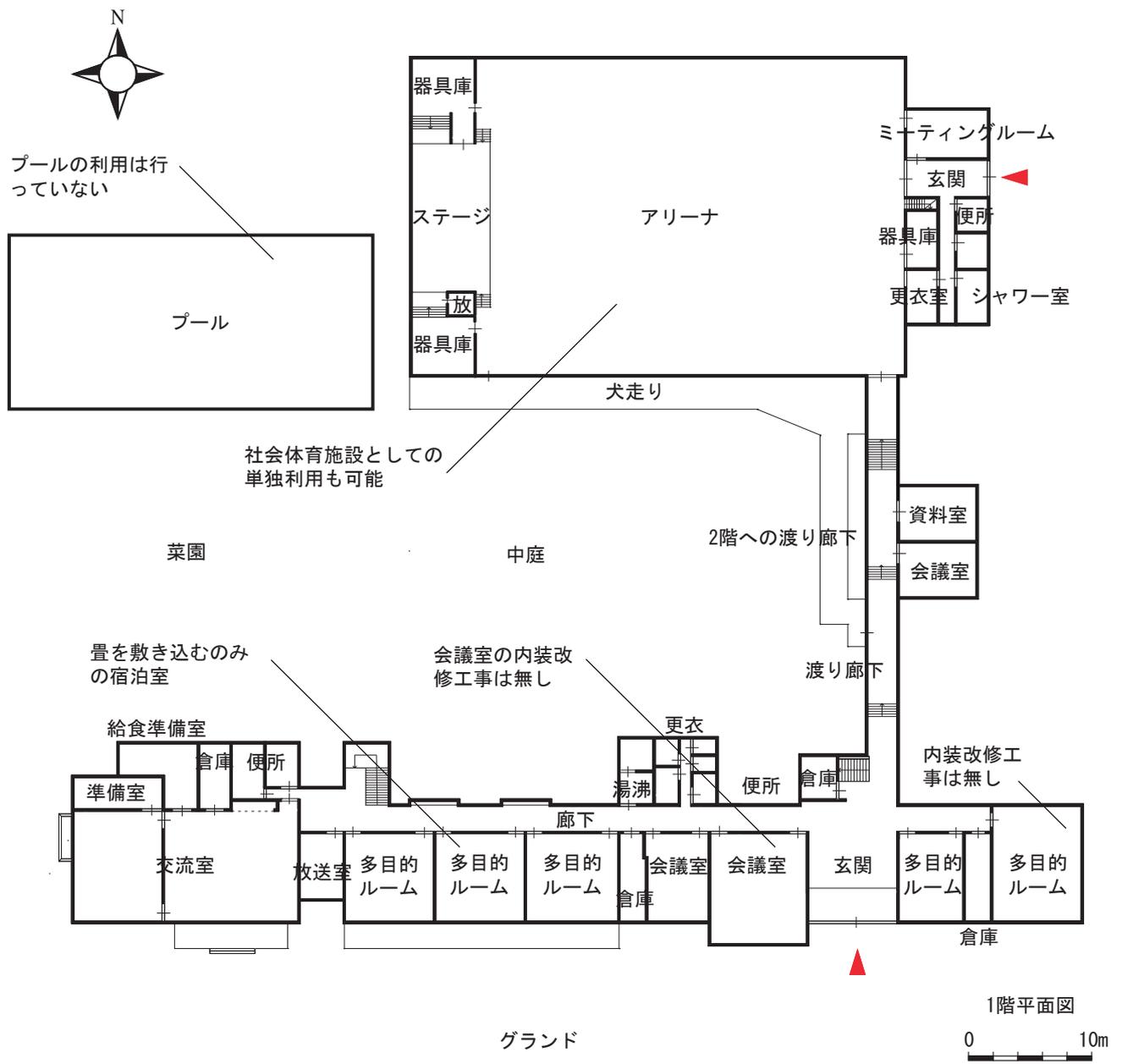
資料図 4-11-3 会議室内観 基本的に教室時の内装のまま利用



資料図 4-11-4 宿泊室内観 宿泊時は畳を敷いて利用する



資料図 4-11-5 旧教室の後方側内観  
教室内の内装も木を利用



資料 図 4-11-6 改修後平面図

## 12. 宿泊・住居施設 GK

調査日時：2009年8月9日（日）14：00～15：00

### 概要

用途：宿泊型研修施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1989年

利用開始年：1989年

構造：木造2階建て（耐震改修済）

敷地面積：5,433㎡

延床面積：991㎡

建設年：1950年

運営主体：教育委員会から地元地区に委託

主な利用者：各種青年・少年団体、婦人会・敬老クラブ等団体

利用者数：約2,600名/年

### 経緯と施設の特徴

廃校時の児童数は、一学年3人程度であった。地域の中心である学校が無くなり、更に過疎化が進行するのではといった危惧から、建物を残して欲しいとの要望が地元から出された。町主体で再利用の用途を検討し、最終的に地元との協議を経て、宿泊型セカンドスクールとなり、今年で供用20年となっている。

廃校が再利用されたことで地元は元気づけられ、特に夏季は利用者も多く、地域全体に活気が溢れる。利用者は、学校の夏合宿、バスバンド・バレーなどの青少年の合宿や、家族連れの利用も多い。食事は、3食とも旧講堂を利用した食堂で提供しており、最大120食/日が対応可能である。2階研修室には、天体ドーム（天体望遠鏡）も設置されており、利用者に好評である。

グラウンドに新設したバーベキュー場の活用や食堂での高齢者への食事サービスなどを通して、地域との交流も積極的に行っており、野菜などを無償で提供してもらうあるほどである。

別段広告は行っていないが、宿泊費が一人2,000円/泊と安価なこともあり、利用者は約2,600人/年である。週末は満室となることも多く、可能であれば宿泊室を増やしたい。

体育館は、廃校直前の1986年の建設で新しく、また管理は別で、地域住民の利用が主体であるが、宿泊客の利用も可能である。

グラウンドは、昨年までは盆踊りや区民運動会の会場として利用



資料図 4-12-1 建物外観 左側が体育館  
手前は新バーベキュー場



資料図 4-12-2 廊下内観 床・壁・天井  
とも内装を更新



資料図 4-12-3 宿泊室内観 定員は15名  
で内装材を全て更新



資料図 4-12-4 宿泊室内観 2段ベッドは  
定員8名でほかに和室有



資料図 4-12-5 食堂内観 旧講堂で暖炉も設置されている



資料図 4-12-6 浴室内観 他にコインシャワーも設置

していたが、今年からは公民館の運動場で行うこととなった。

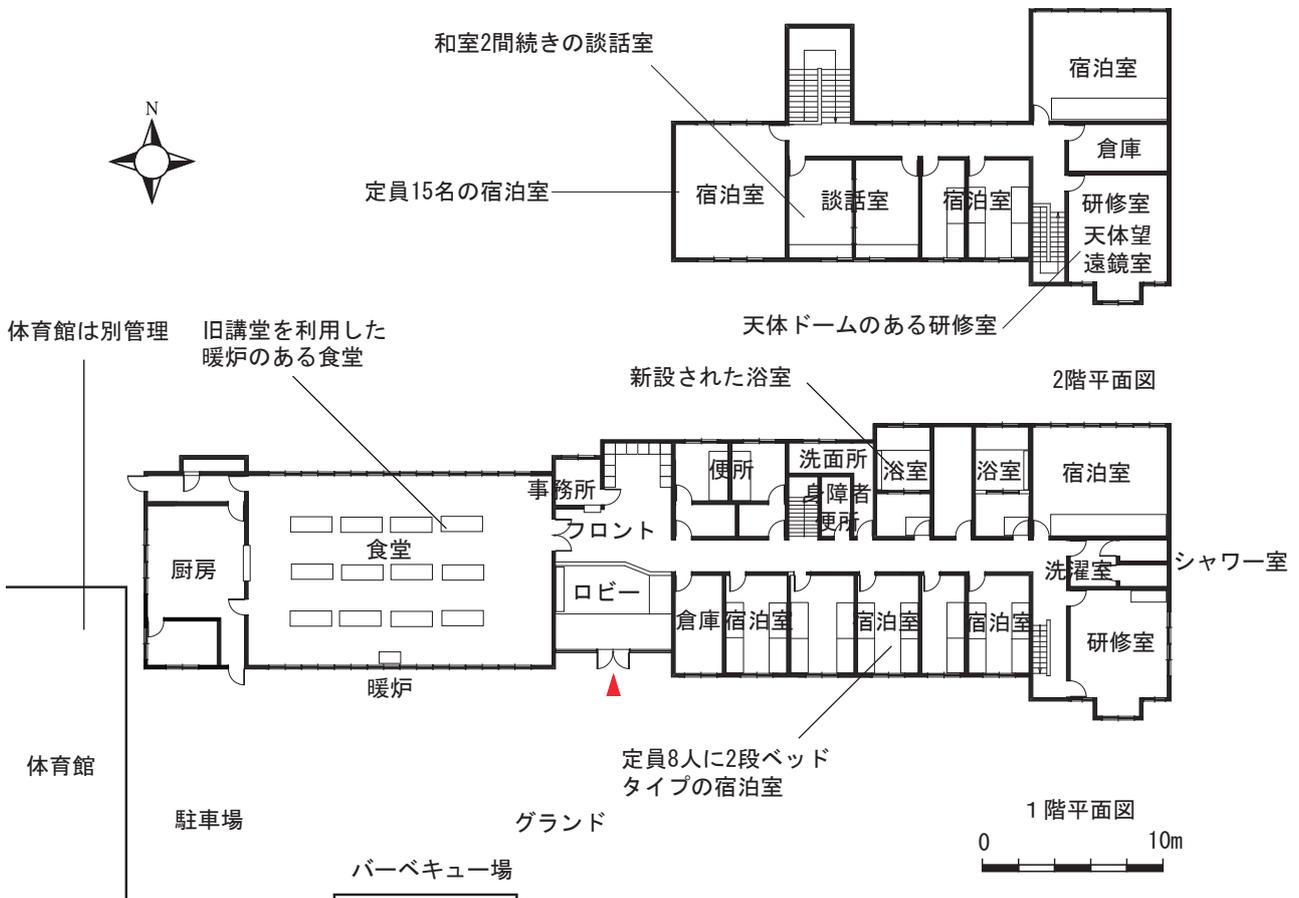
土地、建物とも市の所有で、管理は地区が市からの委託を受けて行っている。今後は、指定管理者となる予定。

冬季は、積雪が約2mにもなり現在、休館としているが、暖房設備の設置や道路の除雪費用等の課題が解決されれば、営業を行いたいと考えている。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、教室・職員室の宿泊室への改修、浴室・シャワーの新設、トイレの水洗化、旧講堂の食堂・厨房への改修である。基本的に内装材は全て更新しており、外壁、及び屋根の更新も行っている。耐震改修工事も行い、改修費用は「公立学校施設整備補助金(集団宿泊教育利用施設整備事業)」を利用し、市の負担で行った。大規模な改修工事を行ったことから、元学校であったことに気付かない利用者も多い。

廃校施設を再利用する長所は、学校に宿泊するなどの他の宿泊施設では経験できない体験ができることで、リピーター客が多いことからそのことが伺える。



資料 図 4-12-7 改修平面図

### 13. 宿泊・住居施設 KK

調査日時：2009年7月9日（木）12:50～14:15

#### 概要

用途：体験型イベント交流施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2000年

利用開始年：2006年

構造：RC造3階建て（新耐震基準）

敷地面積：4,234㎡

延床面積：1,945㎡

建設年：1983年

運営主体：町

主な利用者：都市地域居住者、地域住民

利用者数：約1,000名/年



資料図 4-13-1 建物外観 地区の中心にある利用しやすい立地



資料図 4-13-2 新設されたバーベキュー場（手前側）

#### 経緯と施設の特徴

当該地区は約200世帯で、高齢化率は35%を超え、過疎指定地域となっている。

地元から地域活性化のためにも再利用して欲しいとの意見を受け、地域の人たちの要望を聞きながら町主体で再利用の検討を行った。

都市地域の人と海・山・川の自然との交流を通して農山漁村地域の活性化をはかるグリーンツーリズムの拠点となる宿泊施設とすることとした。

利用者は、県外からの利用やリピーターもあるものの、宿泊室が教室の大きさのままの3室のみで、また家族単位の利用が多いことから、利用者数が目標を下回っている。

今後は、大学サークル、釣りサークル、観光につながりのあるマスメディアなどを積極的に利用して団体利用へとシフトし、利用者数を増やして収益の改善をはかりたい。

都市地域から若い利用者が訪れるようになり、地元の人たちが主体的に様々なグループを立ち上げ、当該施設を中心に活発な活動を行うなど、ある程度は地域活性化に貢献することができた。

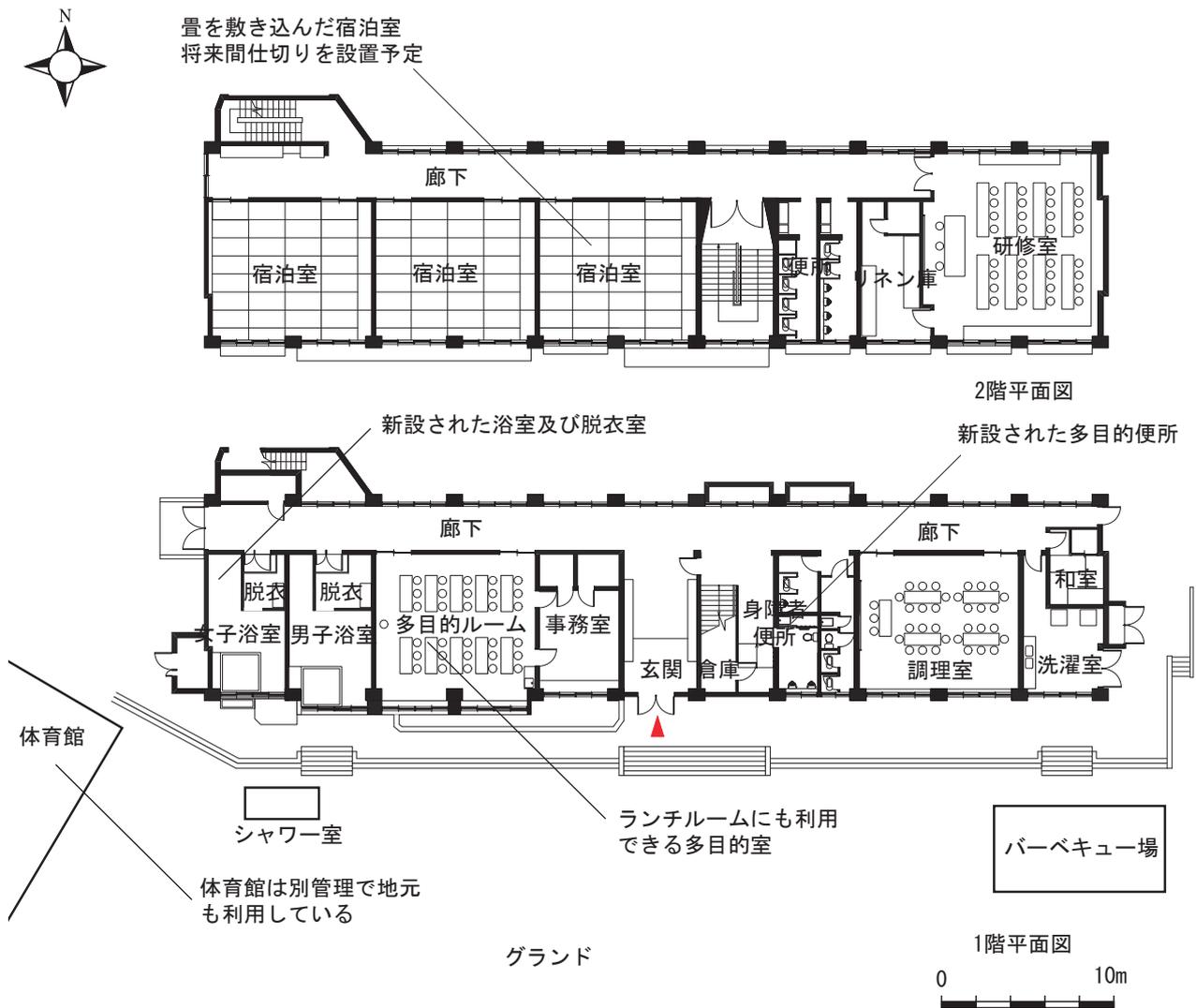
今後、漁協のセリの見学、隣接する海水浴場との連携、地元との交流を深める企画など、運営面を強化したいところであるが、町の担当部署は2名で、相当な人材が不足している。

土地は借地で、建物は町の所有となっており、運営・維持管理も町で行っている。

改修工事の概要

校舎は1983年の竣工で、主な改修工事は、浴室・脱衣室の設置などである。2階の宿泊室は、畳の敷き込みのみで、現在、3階の教室は使用しておらず、将来利用者が増加した場合に宿泊室にする予定である。グラウンドには、バーベキュー場を新設した。

家族利用の場合、教室単位のままの空間では広すぎるため、少人数の宿泊にも対応できるようにパーティションなどの間仕切りの設置を検討している。現在は、簡易宿泊施設としての登録のため、宿泊人数の増加には新たな設備投資が必要となり、町の厳しい財政状況のままでは難しい。なお、設計は町内の設計事務所で、施工はゼネコンで行った。



資料 図 4-13-3 改修後平面図

## 14. 宿泊施設 TA

調査日時：2009年8月1日（水）14：45～15：45

### 概要

用途：体験宿泊施設、社会体育施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2007年

利用開始年：2007年

構造：木造2階建て（旧耐震基準）

敷地面積：4,887㎡

延床面積：1,749㎡

建設年：1944年

運営主体：民間

主な利用者：都市部居住者、地域住民

利用者数：約500名/年

### 経緯と施設の特徴

少子高齢化が進み、4年前に小学校7校（内5校が木造）を2校に統合した。維持管理費が必要な廃校は取り壊すべきとの意見が多く出されたことから、ダムによる上流・下流地域の市町村間交流により、下流の自治体が上流の再利用施設の維持・管理費を負担するスキームで数校の廃校を残す構想があった。

当該小学校が母校であり、活力を無くしてしまった地域の活性化への思いと、上述のスキームとした場合、地域の人たちが廃校を利用しにくくなると考えたK氏と同じ思いを持った福祉法人とともに町に再利用の申し入れを行い、宿泊型地域コミュニティー施設として再利用することとなった。地域住民の交流の場として、地域の文化施設として、また農山漁村地域と都心地域の人たちの交流の場として活用している。福祉法人と町で賃貸借契約を結び、K氏が施設の管理人となり、運営を行っている。

### 改修工事の概要

校舎は1944年及び31年の竣工で、改修工事を行った部分には無い。雨漏りもなく建物の状態は良好で、耐震改修工事も行っていない。

浴室は無く、宿泊者は近くの温浴施設を利用しているが、浴室の設置は今後の課題のひとつである。子供の宿泊者は、ドラム缶



資料 4-14-1 建物外観 窓はアルミサッシュに更新されている



資料図 4-14-2 建物外観 2階建ての校舎側に講堂がある



資料図 4-14-3 宿泊室 旧教室に直接寝具を敷いて宿泊する



資料図 4-14-4 図書室 当時のままの状態が残されている



資料図 4-14-5 給食室 食器類も常備されており自炊が可能

風呂を提供しており好評である。寝具は、施設側で提供している。食事は、旧家庭科教室を利用した自炊、又は持ち込みとする場合が多い。

廃校施設を再利用する長所は、地域に学校が残っていることで、公共施設の少ない農山漁村地域の中心として地域の心のよりどころとなっていることである。今後、様々な工夫を行うことにより地域への経済効果も期待できると考えている。



資料図 4-14-6 講堂内観 内装は廃校当時のまま

d) 医療・福祉施設

15. 医療・福祉施設 T1

調査日時：2009年6月19日（金）13:00～14:20

概要

用途：障害者福祉施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1996年

利用開始年：1998年

構造：RC造2階建て（旧耐震基準）

敷地面積：7,753㎡

延床面積：1,128㎡

建設年：1969年

運営主体：民間企業

主な利用者：施設入所者、地域住民

利用者数：約20名/年（施設入所者）

経緯と施設の特徴

当初、都心部での新築を検討していたが、資金的に難しく既設建物の再利用へと方針を転換した。工場は、空間が広いものの福祉施設としての利用が難しく、公園に隣接する大きな民家は適したものが見つからなかった。その中で廃校は、障害者がのびのびと利用できる施設であることが分かり、市町村合併の予定であった当該廃校（地区は2世帯）を知り、知人を通して町と交渉を行い、建物のみを購入した。土地は、市の所有で、建物の建築面積部分のみを賃貸している。

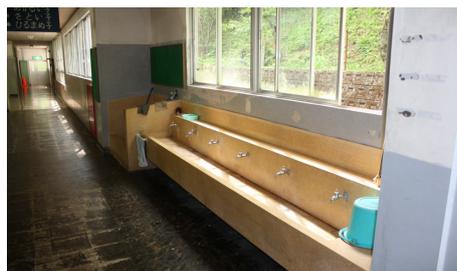
自宅からの通学を前提としていたが、福祉施設を追われ生活する場を必要とする入園者が増加したため、宿泊型の学校とした。生活のリズムを作るためにも生活の場と学ぶ場を独立させることが必要と考え、当該施設からほど近い既設建物を寮へと改修し、バスで通学することとした。

当初は、障害者、地域住民、一般の人との交流イベント、大学のサークル・体育系クラブの合宿なども行っていたが、建物の用途変更が必要になってきたことがわかり、資金的に改修工事を行うことが難しく、運用を中止せざるを得なかった。

地域住民、卒業生、及び元教師などが訪問した際に喜んでもらえるよう、散逸していた歴代校長の写真や学校の資料を整理し、



資料図 4-15-1 建物外観 グラウンドは地域との共同利用



資料図 4-15-2 廊下 ビニル床タイルが剥がれたまま



資料図 4-15-3 学校の資料を整理して展示したメモリアルルーム



資料図 4-15-4 談話室 譲り受けた畳が敷き込んである



資料図 4-15-5 旧宿泊室 かつてはここで寝泊まりをしていた



資料図 4-15-6 1階ランチルーム前に新設された浴室と脱衣室

メモリアルルームとして設置した。

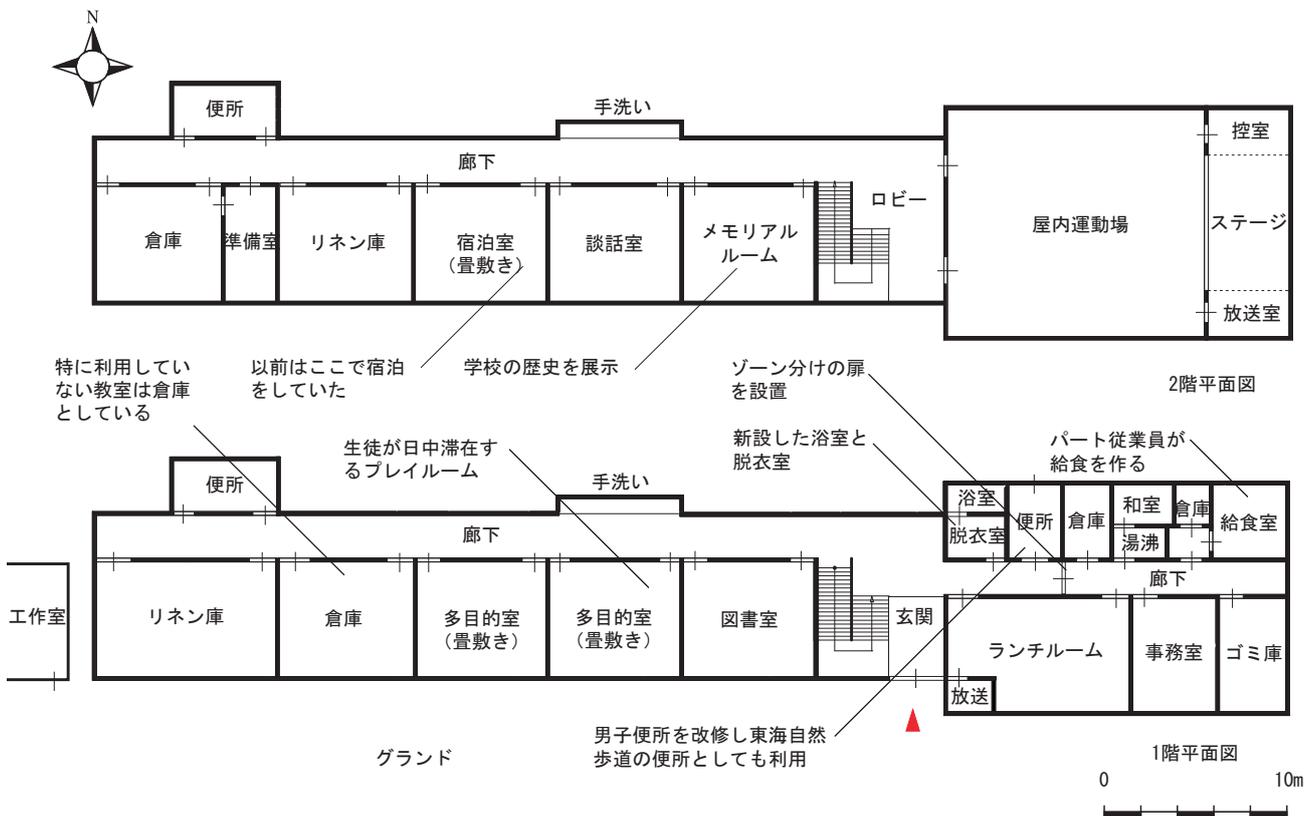
建物が残っていること自体が過疎地域の心のよりどころとなっている。大規模な改修を行わなくても障害者、健常者など様々な人たちが交流できる仕組みを検討中で、美大の学生や若い芸術家のアトリエとしての利用や建物壁面などを創作のキャンパスに活用し、障害者や地域住民に無料で芸術を教える、歌や陶芸などの制作発表の場として情報発信を行うなどを考えている。

プールは、メンテナンスが大変で利用していないが、将来利用したい。グラウンドは、地域の公園となっており共同利用している。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、風呂の新設で、教室は畳を敷き込んで利用している。冬は寒く夏は標高が高く涼しいことから、空調は設置していない。既存建物の改修工事による制約は特に無かった。新耐震以前の建物ではあるが、耐震的な不安は特に無かった。

初めに知人の建築士が改修設計を行い、予算に収まらなかったため、必要最小限の工事に絞り込み、工務店で再度見積りを行い予算内に収めた。現在は、建物の半分程度を利用しており、そのほかの教室は倉庫として利用している。水道水はダムからの専用導水管で引き込み、利用している。



資料 図 4-15-7 改修後平面図

## 16. 医療・福祉施設 TN

調査日時：2009年6月25日（木）14:00～15:20

### 概要

用途：老人在宅介護支援事業所（デイサービス）

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2002年

利用開始年：2003年

構造：木造1階建て（旧耐震基準）

敷地面積：14,081 m<sup>2</sup>

延床面積：1,797 m<sup>2</sup>

建設年：1955年

運営主体：医療法人

主な利用者：デイサービス利用者

利用者数：約30名

### 経緯と施設の特徴

地元から、廃校のまま長期間放置しておくことは防犯の観点から好ましくないとの意見が出されていた。また、当該地域は高齢化率が35%を越えているにもかかわらず、デイサービス施設が無かったことから設置の要望が出されていた。

以前の病院は車で20分程度の場所にあり、デイサービス施設の運営も行っていたが、当該廃校は高速道路や国道に隣接した立地良さとデイサービス施設が周辺に無かったことから、地元と町と協議を行い、病院（介護療養型病院52床、外来は約40人/日）を新設移転し、旧校舎の管理教室棟をデイサービス施設として再利用することとなった。なお、土地、建物とも市の所有である。

デイサービス施設の登録収容人員は30人で、実利用人数は25人程度である。昼食時など全員が集まる場合は既に手狭となっており、近い将来廃校を壊しての建て替えを計画している。

校舎が残り、利用されていることは地元で好評で、当初は卒業生を中心に多くの訪問があり、隣接する保育園の園児との交流もあった（保育園はその後閉園となった）。

現在、病院主催の夏祭りを年一回開催し、地元と交流をはかっているが、もともと文化芸能が盛んな地域であり、これをキーワードとして、今後更に地元との交流を深めていきたいと考えている。



資料図 4-16-1 建物外観 老朽化が進んだ手前側の一部を撤去



資料図 4-16-2 事務室内観 天井と壁は再塗装を行っている



資料図 4-16-3 既設建具を再利用した新設間仕切り壁（右）



資料図 4-16-4 外部建具は既設を再塗装して利用している



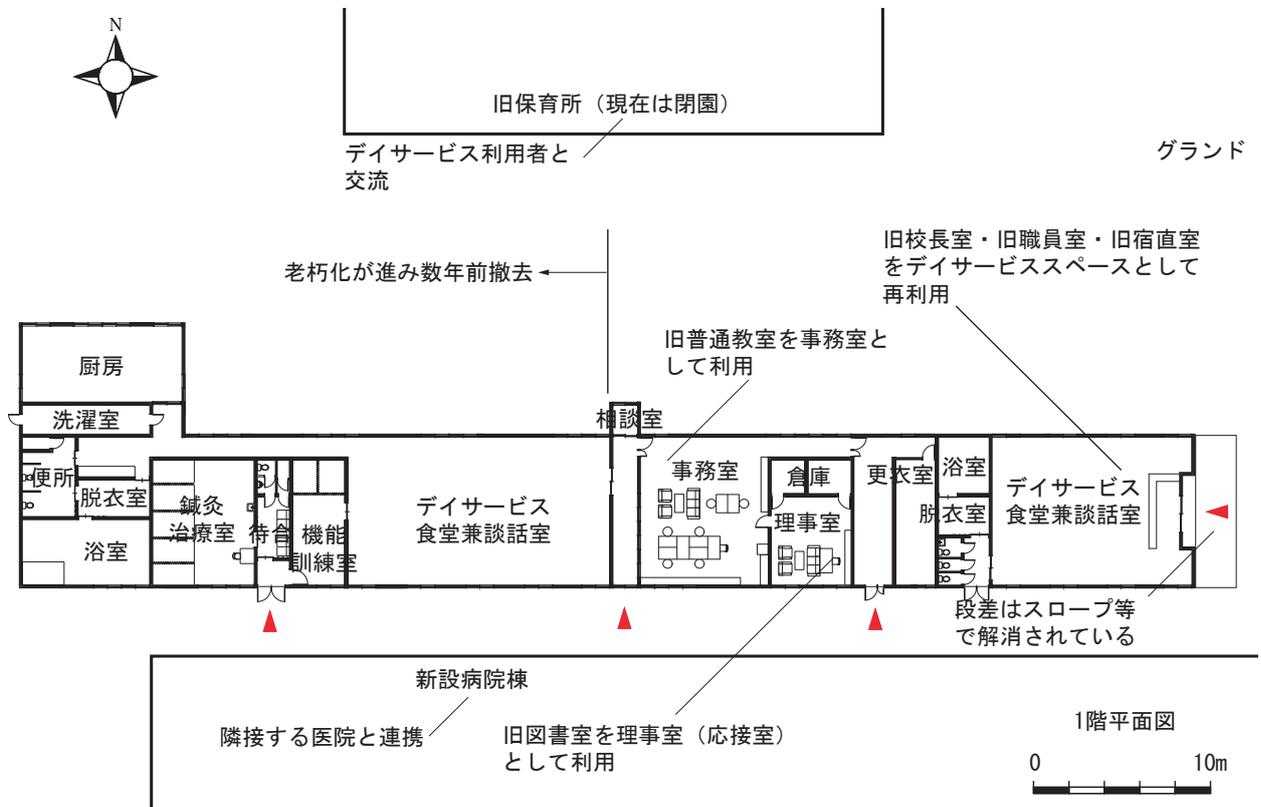
資料図 4-16-5 天井を新設した更衣室

改修工事の概要

主な改修工事は、浴室・脱衣室、厨房及び便所などの水廻りの新設と旧講堂の改修で、講堂がデイサービス食堂兼談話室の空間ボリュームに最適であったが、老朽化が進んだことから数年前に撤去した。その他の改修工事は、間仕切り壁の撤去・新設、及びスロープや手すりの設置などのバリアフリー工事で、基本的に木造校舎の良さを活かした施設となるような改修を心がけた。現在はデイサービスのみでショートステイは行っていないため、耐震改修工事は行っていない。地元の工務店の設計施工で、色やディテールなど細かな部分も工夫している。

厚生労働省から高齢者福祉施設として既存の建物を再利用すべきとの指導もあるが、デイサービス施設は設置基準が詳細に決められており、廃校を再利用する場合は改修が必要な部分が多いため、基準を緩和してほしいところである。

廃校施設を再利用する長所は、木造校舎は親しみやぬくもり、思い出も詰まっていることから地域に溶け込んだ施設とすることができる点と、新築と比較してコストメリットがあるところである。短所は老朽化で、雨漏りなどの修繕に手間がかかる。



資料 図 4-16-6 改修後平面図

e) その他の施設

17. その他の施設 TS

調査日時：2009年9月26日（土）17:15～18:15

概要

用途：和太鼓練習場、事務室、宿泊室

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1989年

利用開始年：1990年

構造：木造1階建て（旧耐震基準）

敷地面積：3,649㎡

延床面積：348㎡

建設年：1949年

運営主体：民間企業

主な利用者：和太鼓楽団員

利用者数：-名/年

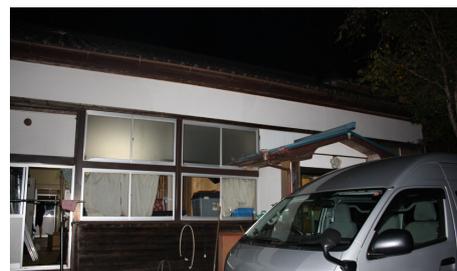
経緯と施設の特徴

当該和太鼓楽団は、名古屋近郊の某市で結成され、当初太鼓の音を近隣に気兼ねすることなく練習できる場所を探していたところ、農山漁村地域の当該町に太鼓を教えに来ていた際に、数校が廃校となることを知った。一方、地域住民は、火事で消失し、地元の寄付で再建された大切な学校が廃校となり寂しく、また少子高齢化が進行していることから、地域活性化の取り組みが必要と考えていた。

地域には楽団が来ることで若い人たちが増え、地域活性化をはかることができること、楽団には気兼ねすることなく練習できるなど双方にとってメリットのある魅力的な場所であった。実際に太鼓の音を鳴らし音の聞こえ具合を地元の人たちに確認してもらった上で再利用することとなった。なお、土地、建物とも町の所有で、賃貸借契約をしている。

ボランティアとして祭り、敬老会、及び道路清掃などを通して交流を深め、転居して20年が経てようやく地域に馴染むことができた。

公演などで都心部へ出るためには3時間程度を要し、立地的には不便であるが、慣れてしまえば特に問題とは感じない。



資料図 4-17-1 建物外観 窓はアルミサッシュへと更新



資料図 4-17-1 事務室内観 隣の太鼓の音が筒抜けで電話が困難



資料図 4-17-2 練習場 2教室間の間仕切りを撤去して利用



資料図 4-17-3 廊下 講演に必要な物置き場としても利用



資料図 4-17-4 食堂 団員はここで3食の食事をする



資料図 4-17-5 新たに増築された浴室  
増築費用は町の負担

### 改修工事の概要

主な改修工事は、教室間の間仕切りの撤去、風呂場の増築、物干し場の設置などある。地盤が緩んで廊下の床が大きく傾斜した際には、町の負担で補修を行った。

廃校施設を再利用する長所は、空間が大きく音を気にせず練習が可能なこと、大型トラックが駐車できる駐車場があること、及び賃料が低いことで、また木造校舎特有の雰囲気も気に入っている。

短所は、2教室間の間仕切りを撤去して主練習場としたものの、太鼓が多く空間が手狭なこと、断熱性能が低く冬季は寒いこと、及び防音性能が低く練習時に事務所で電話が聞き取れないことなどである。

過疎地定住対策として町が設置した町営住宅を女子寮として、学校の下にある元農協の木造住宅を改修し、男子寮として利用している。



資料 図 4-17-6 改修後平面図

## 18. その他の施設 TA

調査日時：2009年6月25日（木）11:00～13:00

### 概要

用途：温泉、産地直売所、体験交流施設、流域交流館

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2002年

利用開始年：2005年

構造：木造1階建て（耐震改修済）

敷地面積：9,119㎡

延床面積：1,887㎡

建設年：1955年

運営主体：教育委員会

主な利用者：地域住民、観光客

利用者数：約43,800名/年

### 経緯と施設の特徴

閉校時の児童数は約50人であった。町主体で約3年、再利用方法を地元と協議し、地域の活性化と地域の人たちの健康の増進をはかるための温浴施設として再利用することとなった。

この地域は古くから温泉が豊富で、以前近くに温泉旅館もあった。源泉は個人の所有であったが、利用されていなかったため町から活用の申し入れを行った。

施設の利用者は、地元の利用が最も多いが、この地域周辺は観光資源も多く、遠方からの利用客も比較的多い。平日は年配者の利用が多いが、週末は若い人や家族連れの利用も加わり、利用者数は平均約120人/日で、収支のバランスが取れており、このことが継続的な施設の維持に重要な視点と考えている。

地元との協議を行い、別の校舎一棟を地域の集会施設、及び週末のみ開く地域の産地直販所として、更に別の一棟は河川の流域交流館として県、及び流域の自治体で共同運営を行い、地域住民のふれあいの施設として積極的に利用されている。当該施設の主催で年に1回、春祭りを開催し地域との交流をはかっている。

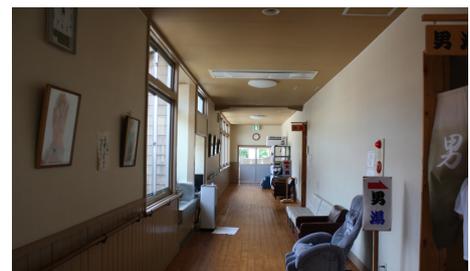
土地、建物とも町の所有で運営・維持管理も町で行っている。



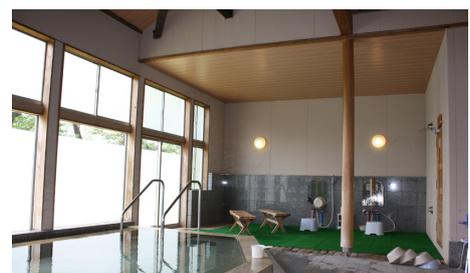
資料図 4-18-1 左が温浴施設 中央が産地直売所、右が流域施設



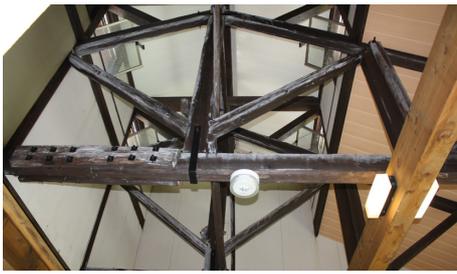
資料図 4-18-2 温浴施設正面入り口  
手前は駐車場を新設



資料図 4-18-3 廊下内観 浴室前は休憩コーナーとして活用



資料図 4-18-4 開放的な浴室内観  
右側の扉がサウナ入口



資料図 4-18-5 小屋根を新設し吹抜のある浴室天井



資料図 4-18-6 食堂・厨房内観  
奥側が増築した厨房部分

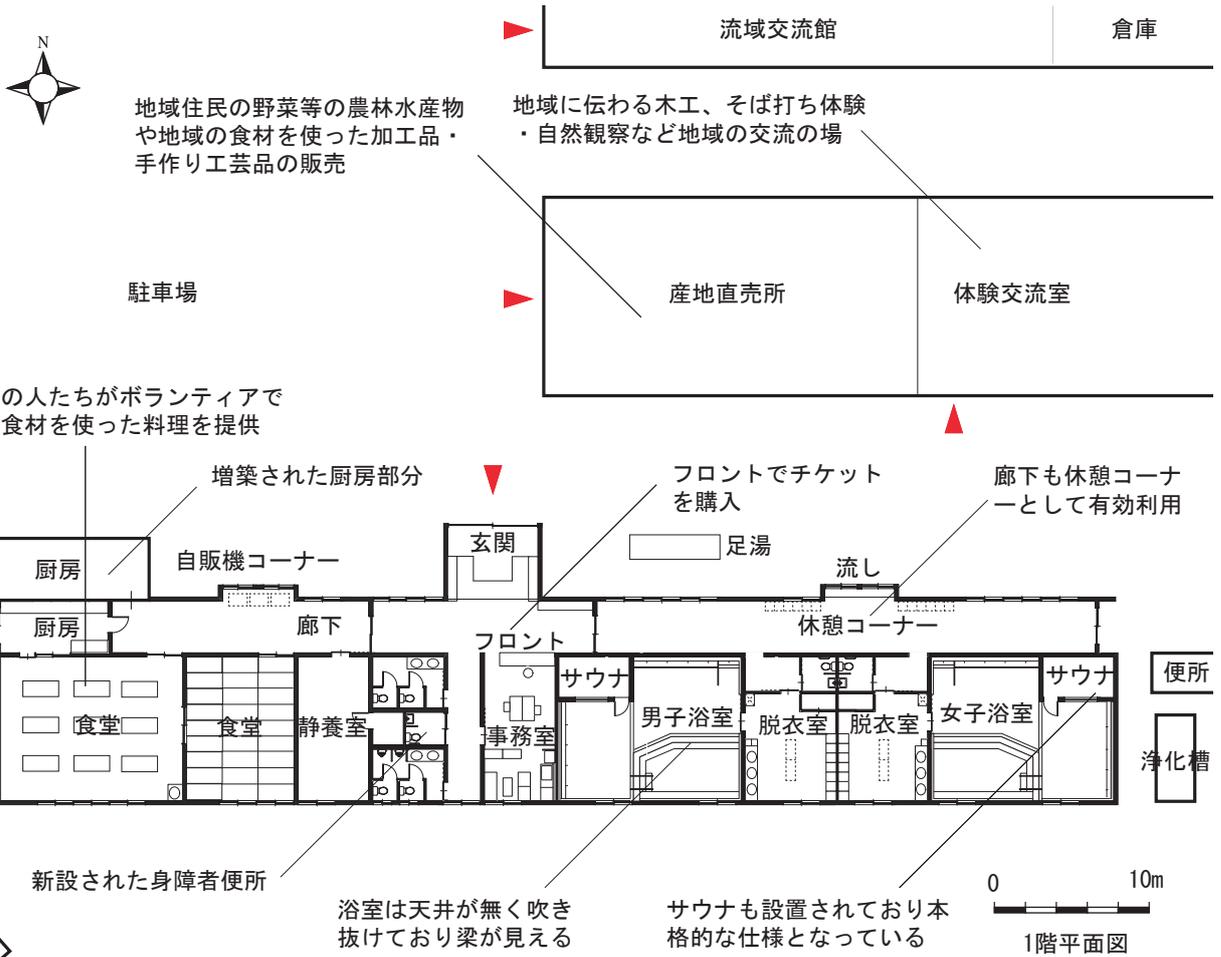
改修工事の概要

主な改修工事は、校舎までの源泉配管の延伸と、風呂・脱衣所・食堂・厨房・身障者トイレなどの新設で、費用は補助金を活用し、町の負担で行った。

浴室は、既設の梁を見せた開放的な吹抜空間へと、大規模な改修工事を行い、サウナも設置した。食堂も併設されており、地元婦人会がボランティアで運営を行っている。

産地直売所、地域交流館も外壁を含めた大規模な改修を行い、積極的に利用されており、複数の施設とすることで地域活性化の相乗効果が得られている。

廃校施設を再利用する長所は、温浴施設ののんびりゆったりとしたイメージに最も適した木造校舎の特徴を活かすことができたことで、利用者に好評で、地域活性化に大きく貢献している。短所は特に無いが、露天風呂の設置などの要望があるものの予算的に難しく、有益な要望に対して応えることができない点である。



資料 図 4-18-7 改修後平面図

## 19. その他の施設 0M

調査日時：2009年7月9日（木）15：20～16：50

### 概要

用途：製塩工場

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2003年

利用開始年：2006年

構造：木造2階建て（耐震改修済）

敷地面積：6,676㎡

延床面積：1,850㎡

建設年：1956年

運営主体：民間企業

主な利用者：職員、地域住民

利用者数：約2,000名/年

### 経緯と施設の特徴

県内の地域資源の活用、及び産業の誘致をはかるため、中小企業で様々な事業アイデアを議論し、海水取水施設の海洋深層水を利用した「塩の販売」を行うこととなった。当初、市が誘致を行っていた工業団地に工場の新設を予定していたが、海水取水施設を視察した際に、隣接する当該廃校が地元から取り壊さず活用して欲しいとの要望が出されていることを知った。

古い校舎を工場として再利用するには、食品衛生管理上の改修に手間がかかること、生産ラインに必要な大型タンクの設置に空間的な制約があること、及び耐震改修を行う必要があるなど様々な課題のあることが分かっていたが、海に隣接する立地と木造校舎の雰囲気の良いを活かし、商品の差別化がはかれると判断し、地元との協議を経て再利用することとした。なお土地、建物とも市の所有で、賃貸借契約をしている。

来館者は年間約1,500名～2,000名で、塩製体験（年間約700人）も行っていたがリピーターが少なく経費もかかるため、今年から工場見学のみとした。

地元と合同での海浜清掃の実施や、イベント開催時は地元婦人会へ弁当を依頼するなど、地元との交流を積極的にはかっている。

当該施設のみでは、集客に限界があり、地域全体で訪れてみたいと思わせる仕掛けづくりが必要である。今後、県や地元、及び



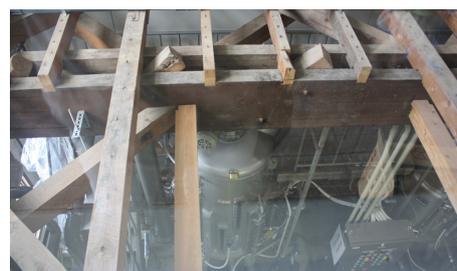
資料図 4-19-1 建物外観 建具はアルミサッシュへと更新



資料図 4-19-2 廊下内観 廊下の床板は廃校時のまま利用



資料図 4-19-3 工場内観 内装は全て新設されている



資料図 4-19-4 工場吹抜部分 2階の教室からも見学が可能



資料図 4-19-5 事務所内観 耐震部ブレースが設置されている



資料図 4-19-6 海水取水施設のアクアステーションを望む

他の施設とも積極的に連携して地域活性化をはかりたい。

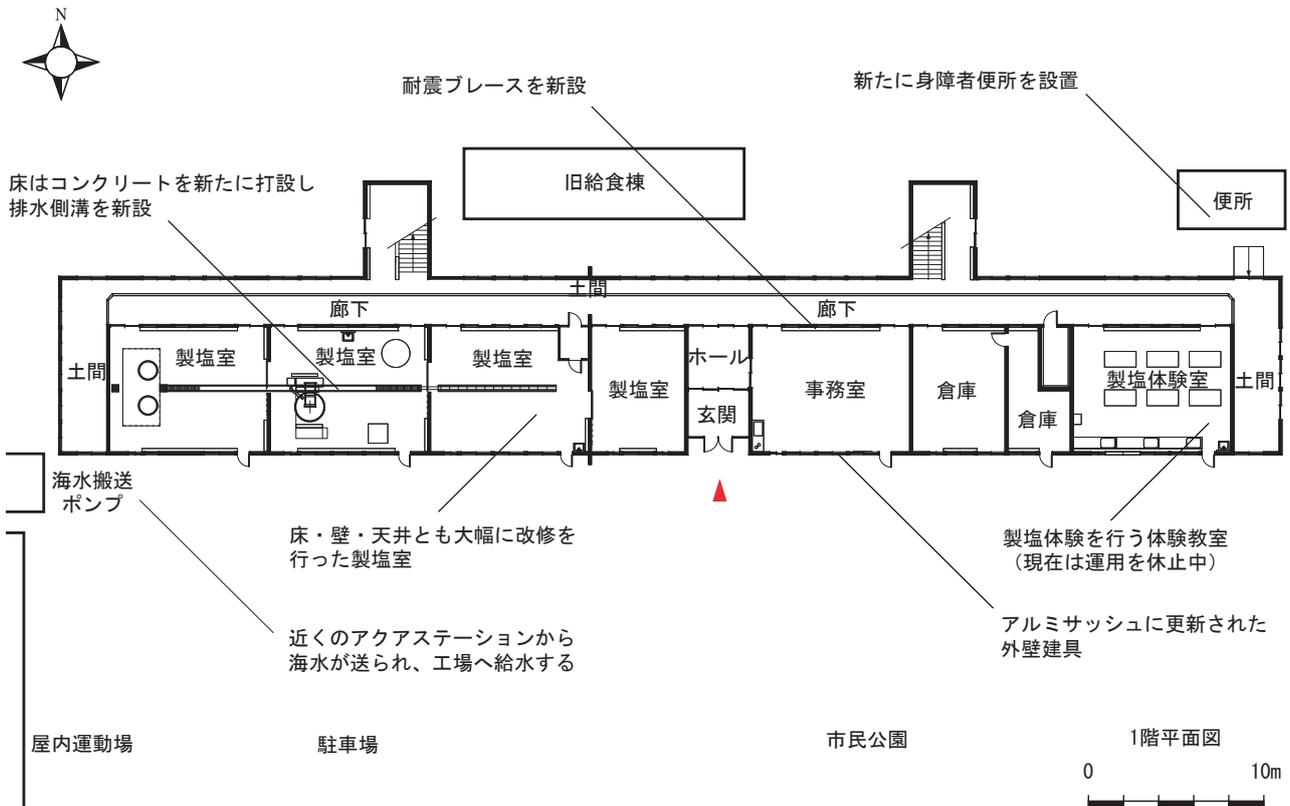
グラウンドは、1/3 を駐車場として利用し、残る 2/3 は地元の公園となっている。地区の世帯数は、約 400 戸で児童は、スクールバスで通学している。

### 改修工事の概要

校舎は昭和 32 年の竣工で、主な改修工事は、海水取水施設から工場までの導水管の敷設、工場ラインの新設、工場内部見学用窓の設置、1 階事務室内装改修、及び 2 階教室天井にロックウール吸音板の設置などである。屋外の別棟便所も全面的に改修を行い、身障者対応とした。当初、2 階に宿泊施設を設置する計画であったが、現在は倉庫として利用している。

改修費用は、全て事業者の負担であった。設計は、設計事務所にて行い、施工は市内のゼネコンで入札にて選定した。

廃校施設を再利用する長所は、話題性のあること、木造校舎のやさしいイメージを持つ商品を作ることができたことである。短所は、工場ラインのレイアウトの制約、断熱性能の低さ、及び限られた予算の中で食品衛生上必要な内壁の新設などが必要であったことで、他にも水廻りの更新、外壁塗装、台車の取り回しのための段差の解消など多くの改修費用が必要となったことである。



資料 図 4-19-7 改修後平面図

f) 事務・研修施設

20. 事務・研修施設 NC

調査日時：2008年11月25日15:00～15:20

2009年11月10日14:00～15:30

概要

用途：創業支援施設、社会体育施設

廃校理由：少子化による児童数減少

廃校年：2002年

利用開始年：2006年

構造：RC造2階建て（耐震改修済）

敷地面積：10,756㎡

延床面積：3,624㎡

建設年：1958年

運営主体：市及びNPO

主な利用者：入居テナント従業員、地域住民

利用者数：-名/年

経緯と施設の特徴

児童数の減少による統廃合で、当該市ではクラス替えが出来ず児童たちの交流が固定化されてしまうことから、1学年1学級の計6クラスを統廃合の基準としている。学区の広さの基準は特に無いが、都心部の学区は郊外の学区と比較して狭いため、近年都心部において廃校が多く発生する傾向となっている。

廃校施設の再利用による地域再生計画などは特に無く、廃校が生じた場合は、はじめに教育委員会内で再利用の検討を行い、その後他の部局へのヒアリングを行うこととしている。当該施設は他の部局から再利用の申し入れがあったため、地元との協議を経て、事務・研修施設として再利用することとなった。

体育館のニーズも高く、地域のスポーツコミュニティとして毎日利用されている。

少子化・高齢化が進んでいることから、高齢者施設として再利用すべきとの意見もあったが、当該市は特養、及びデイサービス施設の建設・運営は行わない方針となっている。校舎を壊すことは地域が寂しくなるため残して欲しいとの意見がある一方で、防犯上の問題から取り壊すべきとの意見もある。

民間から再利用の要望が出された場合は、特定の民間に賃貸を



資料図 4-20-1 建物外観 外壁の再塗装行われていない



資料図 4-20-2 廊下内観 基本的に内装は廃校当時のまま



資料図 4-20-3 管理事務室内観 内装は改修していない



資料図 4-20-4 テナント事務室入口サインの一例



資料図 4-20-5 事務室内観 基本的に内装は学校当時のまま



資料図 4-20-6 一般的な貸し事務室内観

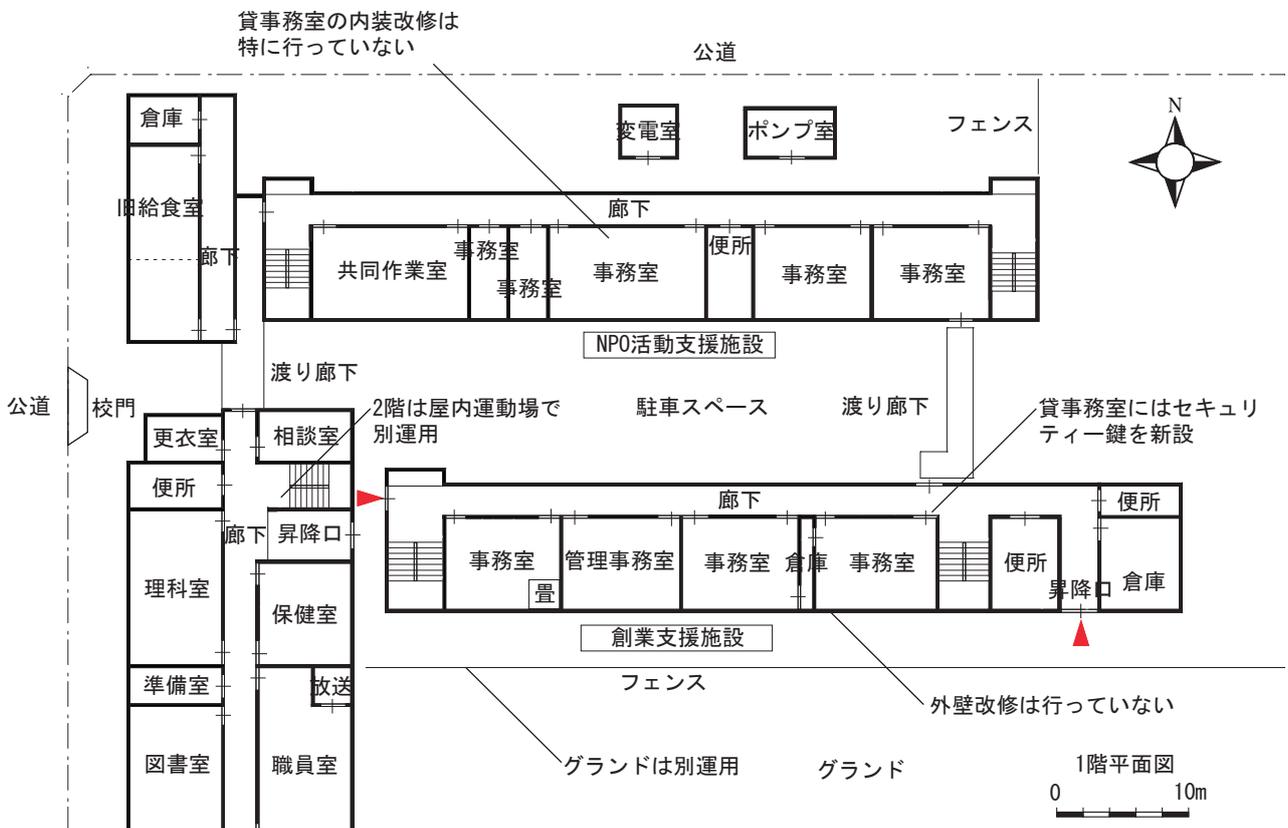
行う理由づけを行い、入札で賃料を決定することとなるが、現段階で要望はあるものの事例はまだ無い。民間への土地、建物の売却は考えておらず、当該施設も土地、建物とも市の所有のままで、管理も市で行っている。維持管理費は、年約 200 万で機械警備を行っている。

補助金を利用したことによる他の用途への再利用の規制は近年緩和され、用途によるものの建設後 10 年を経過すれば、他の用途への再利用が可能となった。

学区が地域のコミュニティの単位となっているため、統廃合には多大な労力が必要である。統廃後も旧学区の単位はそのまま残っており、コミュニティ規模の変化は無い。

### 改修工事の概要

主な改修工事は、機械警備設備の導入で、耐震診断の結果 IS 値が 0.6 以上あったことから耐震改修は行っていない。耐震要素は、再利用の判断の重要な要素の一つである。なお、当該市で現在利用している学校施設の耐震改修工事は、全て完了済みで、現在そのほかの用途の施設の耐震化を進めている。学校施設の建設は、1975 年前後がピークで、築 40 年を超えた建物が全体の約 60% を占めており、老朽化の進行が課題となっている。



資料 図 4-20-7 改修後平面図

## 21. 事務所・研修施設 GK

調査日時：2009年8月14日（金）11：00～12：00

### 概要

用途：教員研修施設、社会体育施設

廃校理由：少子化による生徒数減少

廃校年：2000年

利用開始年：2000年

構造：RC造4階建て（旧耐震基準）

敷地面積：23,465 m<sup>2</sup>

延床面積：7,079 m<sup>2</sup>

建設年：1979年

運営主体：教育委員会

主な利用者：教職員、地域住民

利用者数：約25,000名/年

### 経緯と施設の特徴

新たな団地が造られ人口が急増したことにより新設されたが、その後核家族化の急速な進行により人口が減少し、分離した小学校との統合となった。

当該市は、中核市であったことから中央から教員の研修権限の委譲を受け、独自の研修を行うこととなり、当該廃校を地元と協議した上で教員の研修施設として再利用することとなった。

当該施設の立地は、鉄道が無く市内の遠方から車で約1時間もかかるため、本来ならば市の中心部の廃校を利用したかった。

昨年の利用実績は、研修約6,000件、利用者数約25,000人と高い稼働率であった。

体育館、グラウンドは地元に開放しており、選挙時は投票所としても利用している。3棟ある校舎のうち1棟は利用しておらず、倉庫の利用となっている。また、学校のあゆみを展示したメモリアルルームの整備を行った。

車での移動が主な交通手段であるため、駐車場の確保は必須で平常時で約150台、イベント時はグラウンドも含め更に多くの駐車が可能である。

土地、建物とも市の所有で、運営・管理とも教育委員会で行っているが、セキュリティは警備会社に委託している。



資料図 4-21-1 建物外観 建物の状態は良好である



資料図 4-21-2 大会議室 2教室の間仕切り壁を撤去して設置



資料図 4-21-3 研修室 教室は模擬教室としても利用される



資料図 4-21-4 休憩室 床はタイルカーペット敷きとなっている



資料図 4-21-5 市内の学校全てのサーバー室 空調機を新設



資料図 4-21-6 閉校までの歴史を展示したメモリアルルーム

### 改修工事の概要

主な改修工事は、大会議室の設置と非常用照明等の防災設備、及び空調設備等の設置である。教室のモジュールのままでは200～300人収容の大会議室が設けられないため、教室と廊下間の壁を撤去して150人収容の会議室を2室設置した。バリアフリー工事は、一般便所ブースを撤去して車椅子用ブースとしたのみで、EVは未整備である。そのほか、市内全学校のLANを構築し、統一サーバー室を設置した。設計は、設計事務所にて行った。

廃校施設を再利用する長所は、学校施設であることを活かした臨場感溢れる新任教師の模擬授業研修が行えることで、パソコン教室や音楽室などの特別教室も研修に重宝している。

短所は、特に無く、内装工事を順次行っており、一部で雨漏りが生じているため、今後は外部の改修工事を行う予定である。

## 22. 事務所 KS

調査日時：2009年8月12日（水）13:00～14:00

### 概要

用途：事務所、社会体育施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：2004年

利用開始年：2005年

構造：木造1階建て（旧耐震基準）

敷地面積：9,340㎡

延床面積：1,202㎡

建設年：1950年

運営主体：民間企業

主な利用者：従業員、地域住民

利用者数：-名/年

### 経緯と施設の特徴

当該中学校は、農山漁村地域の立地で、隣接する保育所を改修した工場で生産される製品（ジャム）の出荷の側面のみで考えた場合、宅配便業者の集配回数が少ない、高速道路が遠い、発送コストが高いなどのマイナス要因が多い。

しかし、経営者の母校であり、地域の活性化を願う経営者の強い思いから製品管理の事務所として再利用することとなった。市も雇用の創出が期待できるとの考えであったため、再利用はスムーズに実現できた。そのほか、地元野菜の直売所としても利用している。

現在、技術・家庭科室、木工室等の校舎の一部と講堂は利用していないが、講堂は選挙時の投票所としても利用されている。

グラウンドは地元開放しており、非常用ヘリポートとしても指定されている。

土地、建物とも市の所有で賃貸借契約を結んでいる。

当初の期待通りに雇用を生み出すことができ、地域の活性化に少なからず貢献できている。

同じく廃校となった近くの小学校は、社会体育施設、社会教育施設として再利用されており、民間業者の利用と地域利用の両者のバランスがとれていると考えている。



資料図 4-22-1 建物外観 基本的に廃校当時のまま



資料図 4-22-2 外壁部分 窓も木製のまま利用している



資料図 4-22-3 廊下 内装材は廃校当時のまま利用している



資料図 4-22-4 旧教室を商品発送用段ボール倉庫で利用



資料図 4-22-5 野菜販売を通じて地域との交流をはかる



資料図 4-22-6 事務室 木造校舎は風通しが良く空調機は無い

### 改修工事の概要

改修工事は、特に行っておらず、既存の照明や消防設備等も廃校当時のまま利用している。なお、耐震改修も行っていない。

廃校施設を再利用する長所は、懐かしい雰囲気のある木造校舎を再利用でき、地域活性化に貢献できていることで、及び風通しも良く使いやすい。

建物は、利用しないと老朽化が進むため、積極的に再利用すべきと考える。短所は特に無く、あえて言えば別棟の便所棟の雨漏り程度である。

g) 文化施設

23. 文化施設 TA

調査日時：2009年6月7日（日）14:00～15:00

概要

用途：民族資料館、公民館、社会体育施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1995年

利用開始年：2002年

構造：木造1階建て（耐震改修済）

敷地面積：15,951 m<sup>2</sup>

延床面積：2,030 m<sup>2</sup>

建設年：1950年

運営主体：市

主な利用者：地域住民、ほか

利用者数：-名/年

経緯と施設の特徴

当初、ダム建設により水没した民家の生活道具などの民族資料を展示する民族資料館を新設する計画であったが、町の財政状況が厳しくなったことから、廃校となった当該学校を再利用することとなった。

木造平屋建ての中学校校舎を大幅に改修する予定であったが、文化財保護委員から建物自体も生活の一部として残すべきとの意見が出されたため、建物の改修工事は最小限に留めて供用を開始した。

ほかの施設としては、グラウンドの一部に新設した消防署分署、旧中学校の校舎を改修した公民館、地域の社会体育施設として利用の体育館などである。

また、旧小学校校舎を取り壊したスペースには、駐車場を設けている。



資料図 4-23-1 外観 左側が公民館で右側が管理室のある校舎



資料図 4-23-2 一部の校舎を撤去して駐車場としている



資料図 4-23-3 建物外観 木製建具は廃校時のまま利用している



資料図 4-23-4 廊下内観 内装材は廃校当時のまま利用している



資料図 4-23-5 展示室内観 天井は再利用時に塗装されている

#### 改修工事の概要

主な改修工事は、壁・天井の再塗装、教室南側の旧建具のアルミサッシュ建具への交換、屋根の一部の耐震改修、壁画「弁慶号」の展示室の増築などである。

なお、旧図書館を受け付け兼管理人室として利用している。

改修費用は全て町の負担で行った。



資料図 4-23-6 新設された壁画「弁慶号」の展示室

## 24. 文化施設・倉庫 T0

日時：2009年6月19日（金）15:45～16:30

### 概要

用途：文化施設、社会教育施設

廃校理由：過疎化による人口減少に伴う児童数減少

廃校年：1996年

利用開始年：1996年

構造：RC造2階建て（旧耐震基準）

敷地面積：8,477 m<sup>2</sup>

延床面積：1,097 m<sup>2</sup>

建設年：1977年

運営主体：市教育委員会

主な利用者：市教育委員会、地域住民

利用者数：-名/年

### 経緯と施設の特徴

開校は1922年、閉校は1996年で、以前は地区の中心の立地であったが、老朽化が進み手狭になったことから、1977年に地区の中心から離れた高台に移転した。

廃校時の児童数は、13人であった。

建設には補助金を利用しているため、再利用の用途に制約があり、校長室と事務室のみを社会教育施設として利用し、その他の部分は、書庫兼倉庫として再利用することとなった。そのほか、選挙時は投票所としても利用している。

高台の立地のため、道路からの見通しが悪く、過去数回盗難の被害に遭っており、重要な資料を置くことができない。

警備会社と契約したいところであるが、ナイター照明、トイレの利用などで既に年間50万円程度の経費がかかっており、これ以上の経費増は難しい。

なお、土地、建物とも市の所有である。

高台で水害の心配はなく、避難所として指定されているが、地区の中心から離れていることから、災害時に高齢者が駆けつけられるかどうか危惧される。



資料図 4-24-1 建物外観 外壁の塗装などは行っていない



資料図 4-24-2 廊下 通風のため教室側及び窓側に換気窓を設置



資料図 4-24-3 通風のため設置した教室側の換気ガラリ



資料図 4-24-4 通風のため設置した外壁側の換気ジャロジー窓



資料図 4-24-5 書庫 換気が必要で廊下側に換気ガラリを設置



資料図 4-24-6 収蔵庫 換気が必要で廊下側に換気ガラリを設置

#### 改修工事の概要

主な改修工事は、RC造で気密性が高かったことから、資料の保管の通風を確保するために、南側の教室窓の一部と北側の廊下窓の一部をジャロジーへと変更、また教室と廊下間の上部ガラスを木製ガラリへと変更した。その他の工事は行っていない。

耐震改修工事は、不特定多数が利用する施設を優先して行っており、当該施設では行わない予定である。

## h) 教育委員会ヒアリング

### 25. 教育委員会 T

調査日時：2009年7月1日（水）9：00～9：45

極端に児童が少なくなると児童間の交流、競争による切磋琢磨の機会、及び集団で行うスポーツができないなどの課題が生じる。

統廃合を行う場合は、地元との協議などで5～10年程度の時間を要する。

残すべき学校は、地域の人が考えている古くからある町の中心との関係に配慮することが重要である。

校舎を改修して利用する、同じ敷地に新築する、敷地を変えて新築するの3つのパターンがあるが、どのパターンを採用するかの特に決まった方針はない。

再利用検討委員会は、廃校後に設置され、地元も含めて再利用用途について協議を始めることとなる。

社会教育施設として再利用する場合は、既に公民館・集会所などがあることが多く、積極的に利用されない場合が多い。

また、このような公共施設とする場合は、施設に至る道路等のインフラ整備や補修等も行って欲しいとの要望が併せて出されることが多い。

足湯など、収益性の低い観光施設への再利用は、運営・維持管理費が課題となることがある。

なお、教育委員会の管轄以外の用途へと再利用する場合は、支所で再利用の検討を行うこととなる。

再利用には、道路沿いなどの立地の良いケースを除き、コストのかかる耐震改修が大きな課題となり、更地にすべきとの意見が多く出される。

統廃合後の通学は、スクールバスとなるケースがほとんどで、近年、その方が子供にとっては安全であり、また保護者の理解も得やすい。

## 26. 教育委員会 A

調査日時：2008年11月25日（火）13：30～14：40

2007年、2008年頃から少子化の影響が表れ始め、再編整備計画の策定を行っている。

再利用用途の具体的な検討は、廃校のある各自治体で行っているが、耐震改修が大きな課題となっている。

高校の校舎は、規模が大きく、特別支援学校や私立も含めた学校用途への再利用が、新築と比較してコストメリットがある用途と考えられる。

今後、高齢化がますます進むと考えられることから、老人福祉施設への再利用のニーズがあるものの、バリアフリー改修費がネックとなる可能性が予想される。

有効な再利用が望めない場合は、民間への売却も考えられるが、都心以外の立地はそのようなニーズも無く難しい。

校舎の再利用が出来ない場合は、グラウンドや体育館のみでも地域の自治体で利用してもらおうほうが、維持管理の面からも好ましいと考える。

